50018
教科書文庫
5
300
34-1998
20000
19712

教科書文庫
5
301
34-1948
2000019412

たろう

広島大学図書
2000019412

資料室
375.9
M014

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 19412 圖書

もくじ

一　町へ……二
二　ふみきりばん……二六
三　しんたいけんさ……四九
四　おるすばん……七一
五　はくぶつかん……九三
六　海べの町で……一一七

廣島大學圖書之印

一町へ

（一）

「まあ、たいへんな水だわ」

みつこさんが、大きな声でさけびました。

「やあ、すごいいきおいでながれていくよ」

よこから、としおくんものぞきこんで、いいました。

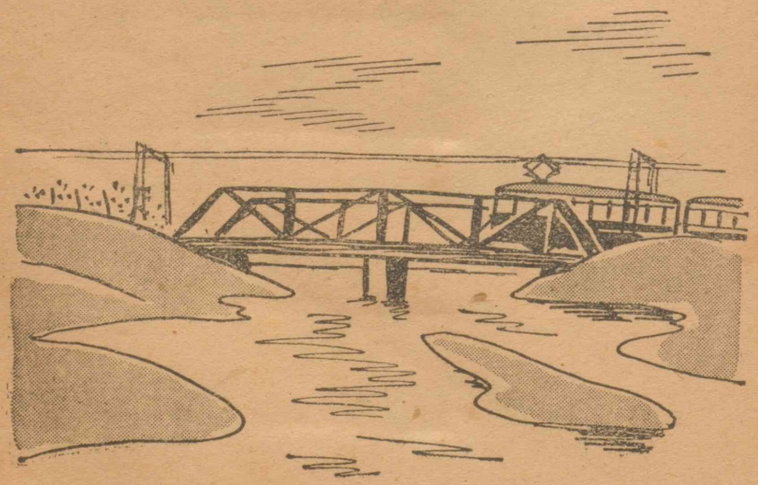
長いてっきょうです。たろうくんたちの乗っている電車は、ちょうど、川のま上を走っていました。そくりょくをゆるめて、ゆっくりわたっていきます。川は、にごった水がゴーゴーと音をたてて、いまにもていぼうからあふれそうです。

乗っていた人たちも、まどから水のいきおいをながめて、こうずいのおそろしいことを話しあっています。

たいふうのために、川かみで大雨があったので、こんなに水がふえたのでしょう。

「としちゃんのうちのほうは、だいじょうぶだったの」

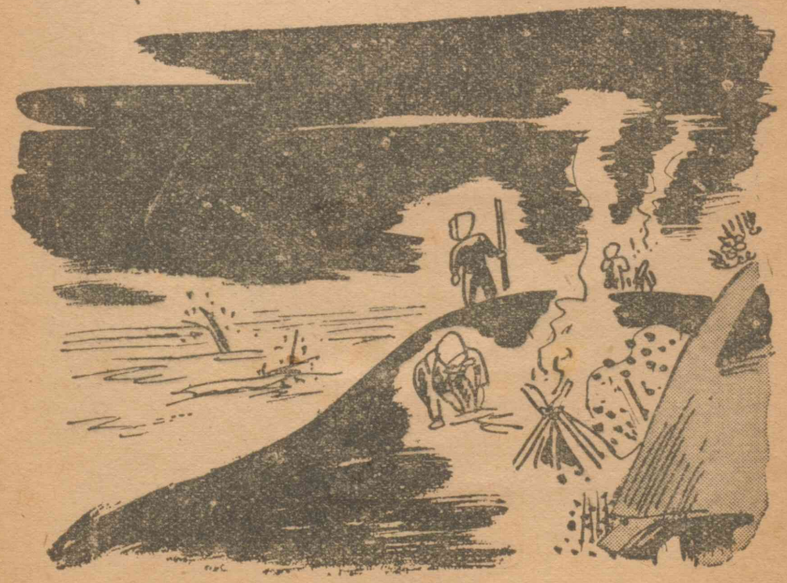
たろうくんが、としおくんにききました。



「うん。大雨のやんだばんがあぶなかった。村の人がそうでで、どてを高くしたよ。おとうさんもにいさんも、とうとう朝まで帰らなかったし、ねえさんたちもねないで、おにぎりのたきだしをするし――」

「きみもみにいったの。」

「あぶないからいけないって。でも、うちのまえからみていたら、どての上が、たき火でまっかだ



った。はんしょうが、ジャンジャンなったよ。

「まあ、こわいわねえ。」

もう町が近いらしく、まどからは、たてこんだ家々のやねがみえはじめました。

きゅうに、ゴーッと音がして、しばらくくらくなりました。としおくんが、くびをちぢめています。

「ああ、おどろいた。いまのはなに。」

「あれはね、ガードを通ったんだよ。小さなトンネルさ。あの上が道になっているんだ。」

まもなく、電車はプラットホームにはいりました。おりるのは、これからみっつめの駅です。

（二）

たろうくんは、きょう、いなかからでてきたいとこのとしおくんと、町へ本を買いにいくのです。大きな本屋のあるところは、町のまんなかなので、きんじょに住んでいる、お友だちのみつこさんのにいさんに、つれていっていただくことになりました。みつこさんも、ぜひいきたいといって、ついてきたのです。

たろうくんの家は、こうがいにあります。近くの駅から、電車で原町というところまでいき、そこで市内電車に乗りかえるのが、いちばんべんりです。

やがて電車は、四人を乗せて、原町の駅につきました。

原町の駅は、じめんからはなれて、たいそう高いところにありました。それは、町のなかでは、人通りや車のゆききがはげしいので、こうかせんといって、電車が高いところを走っていたからです。

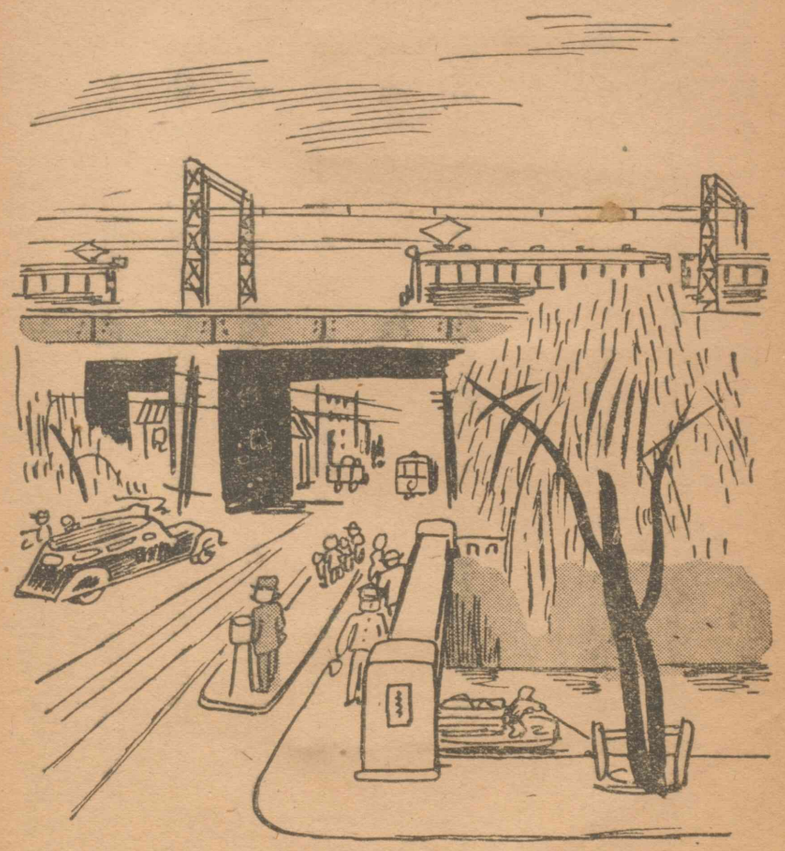
長いかいだんをくだって、やっと改札口へでました。市電の乗り場へいこうとすると、あたまの上を、かみなりのような音をさせて、電車が通りすぎました。

「ずいぶん高いところを走っているんだなあ。くずれておちはしないかしら。」

「どだいがしっかりしているから、だいじょうぶだよ。」

「まるで、てっきょうの下にでもいるようだねえ。」

「としおくんは、地下鉄に乗ったことがありますか。」



このほりわりは、あまりふかくないので、その下を地下鉄道が通っています。じめんの下をうまく使うと、べんりなうえに安全でもあります。そのため、近ごろでは、あさい川ばかりでなく、海のそこをほりぬいてトンネルをつくり、汽車や電車を走らせることもおこなわれています。

いままで、にこにこしながら、ふたりの話をきいていたにいさんが、としおくんにたずねました。

「いいえ、まだありません。乗ってみたいなあ。」

「じゃあ、帰りには地下鉄に乗ろう。」

四人は、すこし高くなっている、ほそ長い安全ちたいの上で、ならんで市電をまちました。よくはれた秋のごごです。ひこうきが一だい、きらきら光りながらとんでいます。

ちょうど、大きなほりわりにかけたはしの上だったので、小さな船が、水の上をゆっくりこいでいくのもみえました。船は、材木をつんでいます。そのすぐあとから、ポンポンと音をたてながら、じょうき船がおいかけていきます。

「どうですか。地下鉄は、この川の下を通っているんですよ。」
にいさんが、としおくんにおしえています。
「びっくりしたわ。お船まであったのね。いったい、乗りものは、いくつかさなって通っているのでしょう。」
みつこさんは、目をくりくりさせて、ほっぺたをおさえました。
あかるい日の光にてらされて、なみきのいちょうの葉が、うつくしくかがやいています。

（三）

市電をおりると、にぎやかなこうさ点です。こうつうじゅんさがまんなかに立って、こうつうのせいりをしています。手をいきおい

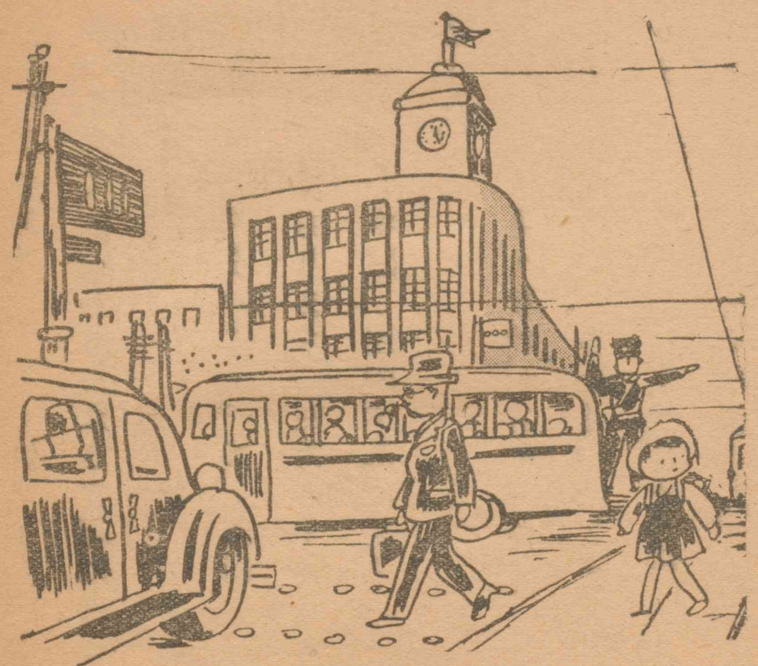
よくふりあげて、ふえをならすと、とめられていた車や人が、いっせいに動きだします。ひとりでに、しんごうが青くなったり、赤くなったりして、おまわりさんがいないときでも、しょうとつしないようになっています。
としおくんはめづらしいので、目をさらのようにしています。すぐまえを、青いバスがいきました。タクシーがつづいてきます。じてん車もたくさん通ります。うまをつけた荷車も、一だいやってきました。みんな、赤いしんごうのときはとまります。
こしのまがったおばあさんも、小さなこどもに手をひかれて、ぶじにむこうがわへわたりました。道のはばは、たいそうひろくて、アスファルトでたいらにつくってあります。人は、道のりょうがわ

の人道をあるくのです。この道も、コンクリートでできているので、雨あがりでも、らくにあるけます。

「ここは、とくににぎやかなところです。まるで川がながれるように、車がつづいていくでしょう。」

にいさんは、としおくんにせつめいしています。

「しかし、こうつうのきそく



さえよくまもっていれば、けっしてあぶないめにはあいません。たとえば、そら、よこぎるときは、この白いせんのあいだをわたるんですよ。」

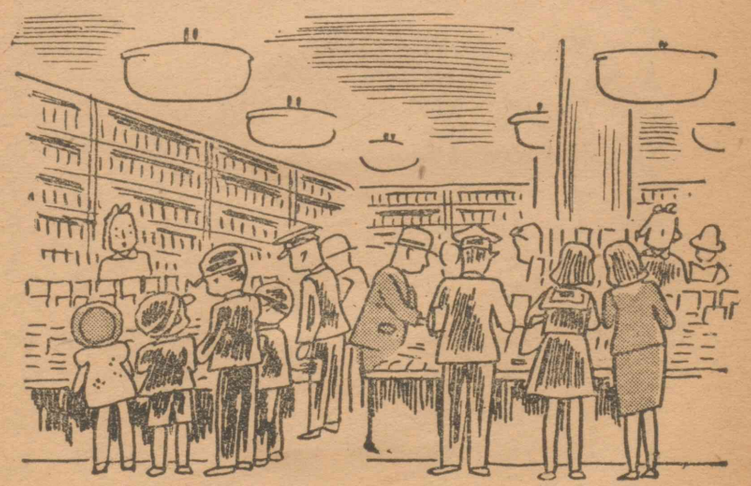
四人は、あたりによく氣をつけながら、おうだんほどうをわたりました。

この通りには、大きな本屋がたくさんならんでいます。

古本の店もあります。しばらくあるいてみて、いちばん大きな店にはいりました。

本は、しゅるいによって、わけてならべてあります。たろうくんたちのよむ本は、左のすみにありました。

おもしろそうなのがあまりたくさんあったので、きめるのにこまりました。本をいためないように、そっとひらいてえらびました。



たろうくんとみつこさんは、一さつずつ、としおくんは、おみやげもいれて、三さつ買いました。たろうくんのは、いろいろな乗りもののお話です。表紙には、ケーブル・カーの絵が書いてありました。

（四）

本屋の店をでると、いつのまにか、日がかげっていました。空には、だいぶん雲がでてきたようです。たろうくんたちは、りょうがわの店をながめながら、すこし町をあるいてみました。

いろいろな店があります。ぼうし屋もくつ屋も、かなもの屋も、かんぶつ屋もあります。とけいも賣っていますし、きれいなおもち

ゃも貰っています。ほしいものは、なんでもありそうな氣がします。

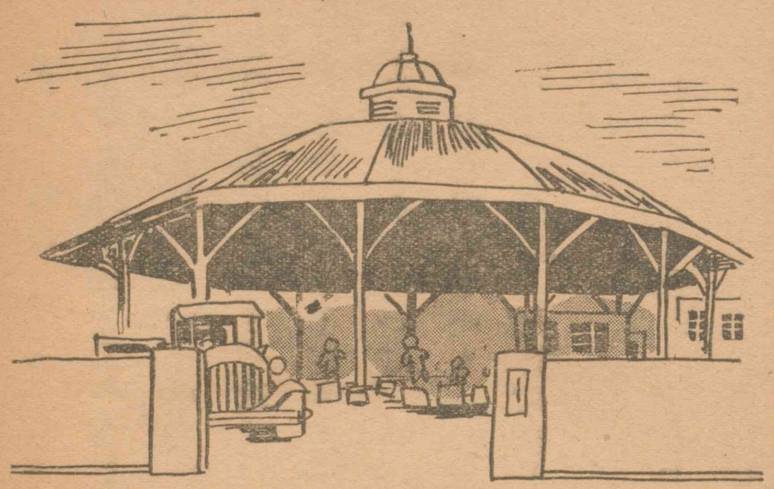
としおくんは、店のかんばんに氣をとられて、もうすこしでポストにぶつかるところでした。

ゆうびんきょくもあります。ぎんこうもあります。えいがかんのまえには、人がたくさんいました。遠くにみえる大きなたてものは大学だ、どにいさんがおしえてくれました。

ゆうびんきょくのうらに、まるやねの、大きなたてものがみえます。いってみると、大きな青物いちばでした。なかでは、男の人が三、四人、元氣よくはたらいています。なかなかいそがしそうです。

「まあ、大きなかぼちゃだわ」

みつこさんが、大声をだしました。すると、近くにいたわかい人



が、にっこりわらって、

「やあ、きょうはもうおわりましたよ。朝くれば、びっくりするほどたくさんありますよ」

と、どなるようにいいました。

きいてみると、朝は、たくさん荷がはいるので、それこそ、目のまわるようないそがしさだそうです。トラックやリヤカーや荷車で、いなかからはこんでくるやさいを、ここからどんどん町にだして

やります。町のやお屋が、あとからあとからやってきて、つぎつぎにやさいを受けとっていきます。それが、みんなのおうちのだいどころに、まわっていくのです。

このいちばは、すぐ近くに鉄道の駅があるので、遠くからはこばれてくるやさいやくだものを受けとるのにも、たいそうべんりです。遠くからくるやさいは、たいてい、まえの日のうちにとどきます。

「ぼくの村のやさいも、やっぱりこんなところまでくるのかなあ」

としおくんは、大発見をしたといったかおつきで、なんどもそういいました。

「そうですよ。やさいだけじゃありません。さかなだって、やはり、鉄道ではこばれて、魚いちばにあつまります。さかな屋さんは、

そこへとりにいくんですよ。

「わたし、魚いちばにもいってみたいわ。でも、きょうは、もうおそいわね。」

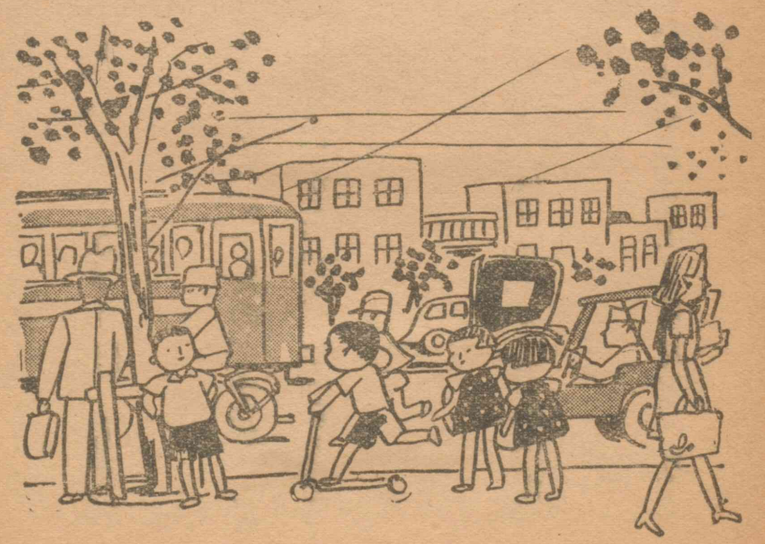
たろうくんたちは、もっと町をみてあるきたかったのですが、おつとめの人たちが帰る時間になると、乗りものがたいへんこむので、いそいで電車に乗ることにしました。

「おや、じんりき車がきた。」

「うん。町でも、このごろまたふえてきたよ。ぼくも、このあいだ、乗せてもらった。」

「まあ、あれ、オートバイでしょう。にぎやかなところだと、なんだかぶつかりそうで、あぶないわね。」

「あんなところで、あそんでいる子がいる。あぶないなあ。」
「でも、ほかにあそび場がないのよ、きっと。」
「だって、きのうのラジオでもいってたよ。道であそんで、けがをする子がふえたって。」
「そうね。ああ、そうだわ。学校がいいわ。学校の運動場であそんだら。それに、こうえんだっていいと思うわ。この近くに、こうえん



はないのかしら。」
「どしちゃんのほうはいいね。あぶなくなくって。」
「そのかわり、とんぼをおいかけて、いけや川におっこちる。ぼく、このまえ、せみとりをしていて、みぞにおちちゃった。もうすこしでとれるところだったのに。町にはせみがいないね。」
「このへんでも、こうえんなんかにはいるって話よ。」

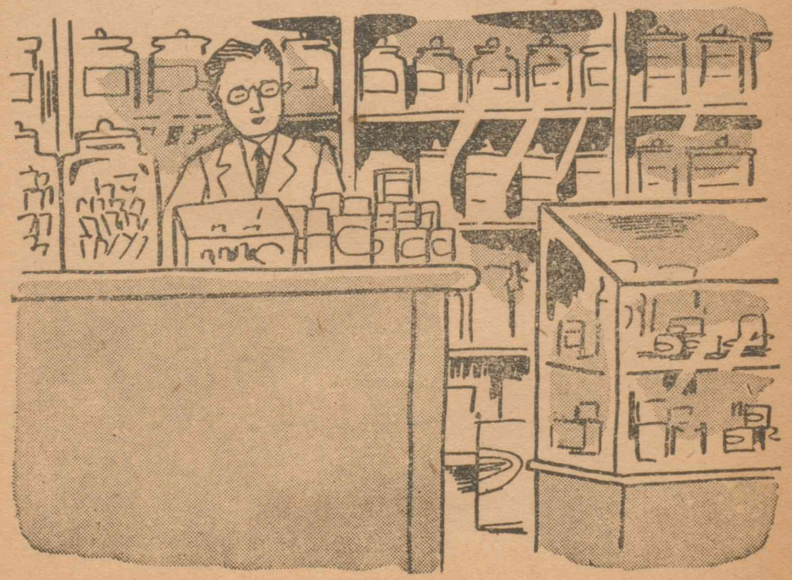
（五）

地下鉄の入口にある店で、にいさんは、はブラシを買いました。みつこさんも、氣にいったのをえらんで、ひとつ買ってもらいました。

「おかあさんのも、いたんでいたわ。まあ、これが、じょうぶそうでいいわ。おかあさん、この色きっとおすきよ」

おかあさんに買ったはブラシはすきとおった水色のえに、まっ白な毛がついていました。みつこさんは、おみやげができたので、とくいです。

この店には、くすりも賣っています。店のなかが、よくせいとん

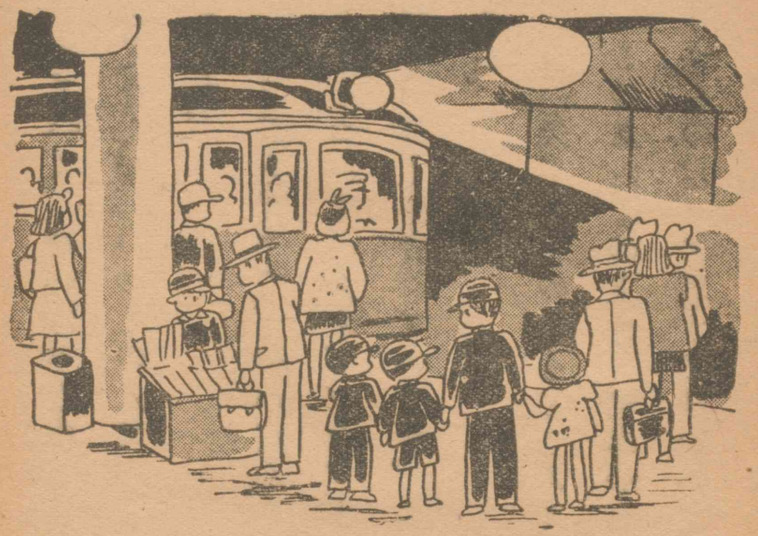


されていて、せいけつな感じがします。たろうくんは、おとなりのおじさんが、いつものんでいるくすりのびんと、おなじのをみつけました。

きっぷを買って、かいだんをおりました。あかるい電とうが、たくさんついています。プラットホームでは、小さなだいの上で、新聞やざっしを賣っています。ちょうど、にいさんくらいの男の子でした。

白い矢じるしのあるところで、二列にならんでまちました。

このあたまの上を、電車や自動車が走ったり、川がながれていたりするのだ、と思うとゆかいです。ぜんろのむこうをのぞいてみたら、まっくらで、遠くに、ぽつんとあかりがみえました。



「つかれたかい。だいぶあるいたからね。」

にいさんが、わらいながらいいました。

「ぼく、もっとみてあるきたいくらいだ。」

「わたし、ちっともくたびれないわ。」

みつこさんは、また目をくりくりさせて、小さなからだで、りきみました。

遠くの方から コトコトとレールのなる音が、つたわってきます。やがて、その音が大きくなると、ゴーッというひびきがして、電車がはいってきました。三だいれんけつです。

戸があくと、人がどっとおりてきました。まっていた人たちも、じゅんじょよく乗りこみます。

「ピーッ。」するすると動きだしました。ざせきがなかったので、四人は、まどのところに立ちました。

トンネルのくらいかべの、ところどころにともっている小さなあかりが、矢のようにすぎていきます。

二　ふみきりばん

（一）

たろうくんの家と学校とのあいだには、ふみきりがひとつあります。電車のふみきりです。しかし、汽車も、ときどき通ります。

汽車の通るのはめずらしいので、小さなこどもたちは、たいていかけてきて、一だい二だいと、かぞえながらみています。

いちばんさきに、黒いきかん車が、シュッシュッとじょうきをはきながら、いきおいよく通りすぎます。ふみきりのてまえにくると、いきなり、するどいきてきをならします。

「ピーッ。」うんてんしゅが、まどからくびをだしているのがみえます。

「ゴトンゴトンゴトン、カタンカタン。」

じひびきをさせながら、きゃく車がなんだいもつながって、通りすぎます。ゆうびん車のついていることもあります。

「おうい、かもつ列車がきたようっ。」

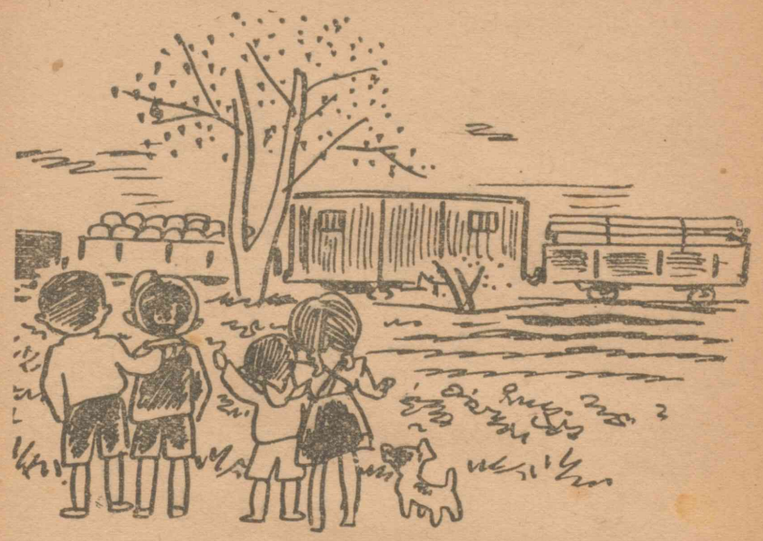
だれかが大声でさけぶと、みんないっせいにかけだします。

かもつ列車は、ゆっくり走っていきます。大きな車や小さな車が、なん十だいもつづいています。やねのあるのも、ないのもあります。

「きょうは、材木ばかりか。」

「おとといのには、石炭がつんであったよ。」

「町からいくのには、なにをつむのかなあ。」

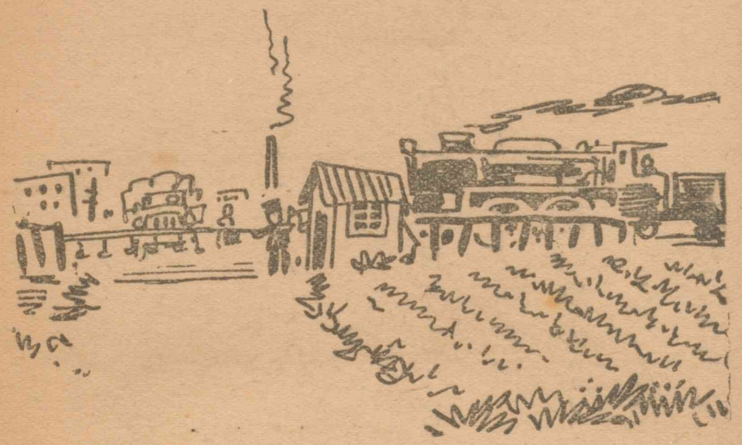


「そりゃあ、きものだって本だって、いろんなたべものだって、いなかにないものはなんでもさ。」

「おひゃくしょうさんの使うどうぐやきかいも、それから、たんぼやはたけにいれるひりょうも、みんな汽車ではこぶんだわ。」

「そのかわり、いなかからお米がくるのねえ。」

まいにちまいにち、かもつ列車をみるのはたのしみです。



（二）

たろうくんは、ふみきりばんのおじいさんとなかよしでした。学校へかよいはじめてからいままで、学校へでる日はいつでも、このおじいさんのかおをみないときはありません。

「おじいさん、おはよう。」

朝、たろうくんがあいさつすると、おじいさんは、にこにこして手をふってくれます。

もう、ずいぶんの年になるのでしょう。おじいさんは、やせていて、せいが高く、すこしこしがまがっています。かおは、じょうぶそうに日にやけていますが、あごのおひげは、もう白くなっています。

「えいやらさっ。——ほい。」

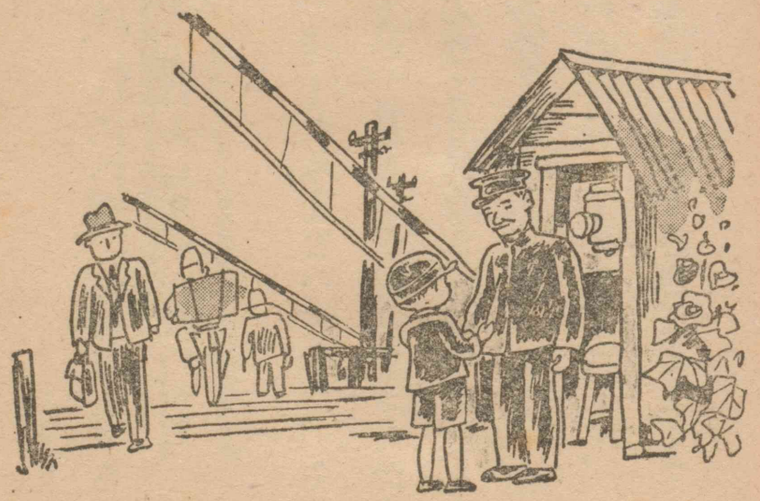
おじいさんは、いつもこんなかけ声で、しゃだんきをあげます。どんなあつい日でも、どんなさむい夜でも、このおじいさんのかけ声と、しごとぶりには、すこしもかわりがありません。こごえるような、つめたい風のふく朝にも、あたりのみえなくなるような大雨のばんにも、つるつるにはげた古がいとうのえりを立てたおじいさんは、おそろしいじこがおこらないようにと、ひとりぼっちで、

ふみきりをまもっています。

「雨が降ったばんはあぶないからなあ。つい四、五日まえにも、この近くで、じてん車がはねられたよ。」

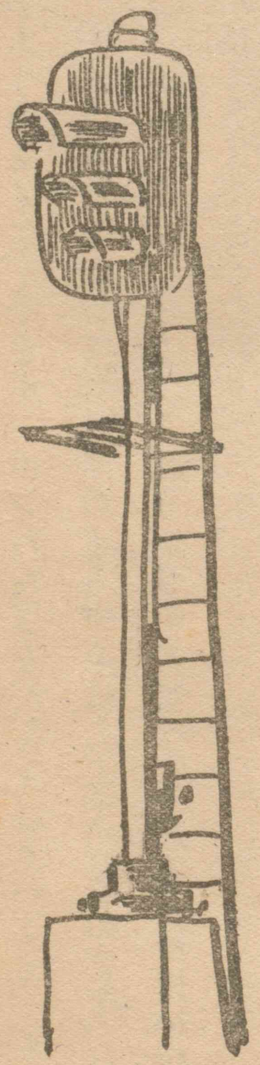
小さなこやのいたじきにこしをおろして、きせるをポンとたたきながら、おじいさんは、たろうくんに話しかけたりします。おじいさんは、たいそう話ずきです。

「ねえ、おじいさん。そこには、



ふみきりばんの人いなかったの。」
「うん、夜なかだったからなあ。もう、うちへ帰ったあとだったんだ。小さいふみきりだと、ひるまでもばんにんがいないから、よく氣をつけて通るんだよ。
あぶないのは、もやがいっぱいで、遠くがみえないときだ。それに、電車がすれちがうときもいけない。ひとつが通りすぎたからって、むやみにとびだすとたいへんなことになる。いいかい、しゃだんきがしっかりあがってからあるくんだよ。」
おじいさんは、こんなふうに、ていねいにおしえてくれます。お話がおもしろいので、たろうくんたちは、ときどき道くさをしてしまったりします。

「ジーッ、ジーッ、ジーッ。」
そんなとき、いきなり、あたまの上で、けいほうきがなりだすことがあります。すると、おじいさんは、すばやく立ちあがって、
「むかしは、こんなべんりなものはなかったよ。これは、電車が五、六百メートルもむこうにいるときから、ジージーなってくれる。だが、けいほうきだって、こしょうしないとはかぎらないからね。ゆだんたいてき、ゆだんたいてき。」

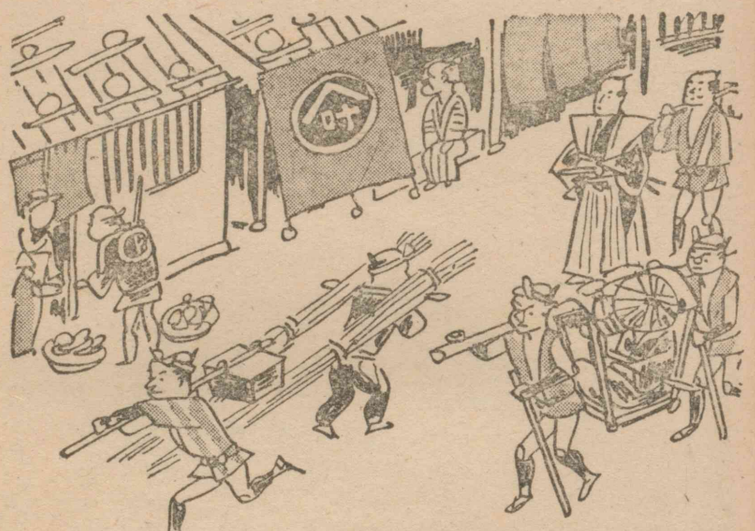

けいほうき

おもしろそうに、手をポンポンたたきながら、こういうと、もうしゃだんきに手をかけて、電車のくる方をにらんでいるのです。

このふみきりは、とくに人通りが多いので、しゃだんきのほかに、けいほうきまであるのだそうです。

（三）

たろうくんが学校へいく道で、きけんな場所といえば、ふみきりのほかには、小川の木ばしと、学校のおもて通りぐらいでしょう。この通りは、むかしのかいどうになっていて、ずっと古くから、旅をする人のあるいた道です。いまは、やさいをいっぱいつんだトラックが、すなほこりをあげながら、通っていきます。



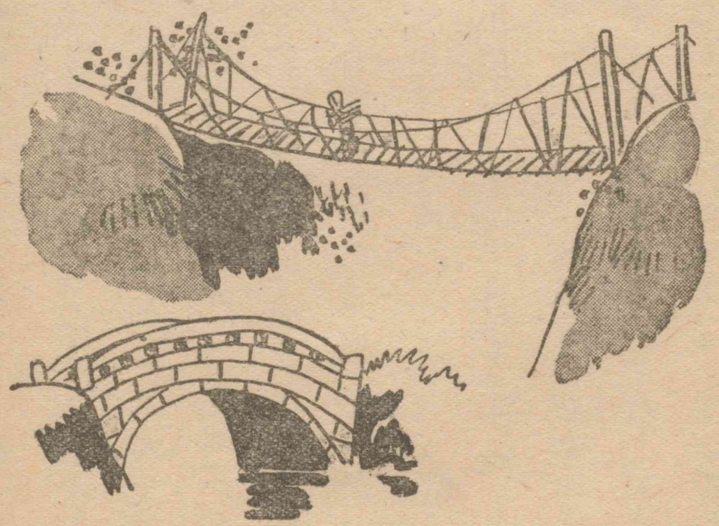
むかしのかいどう

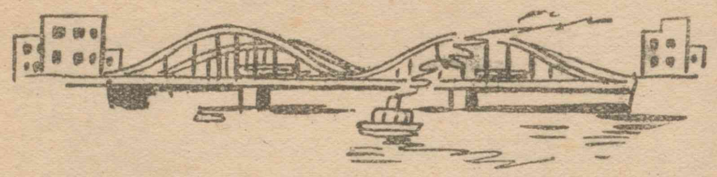
ちかごろの道としては、それほど大きくはないのですが、むかしは、きっとりっぱだったのでしょう。じてん車や荷車なども多いので、朝、学校のはじまるじこくには、六年生がかわりあって、せいりをしています。

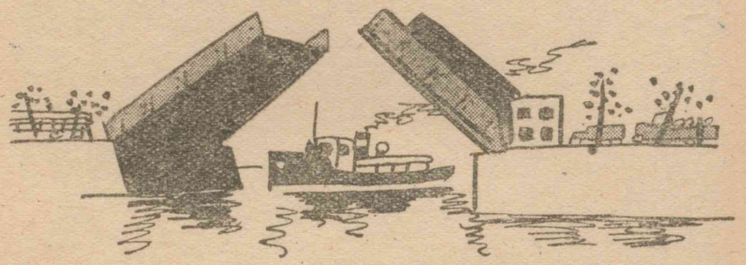
小川のはしは、近いうちに、あたらしい、じょうぶなのがかかるそうです。いまあるのでは、おもい荷をつんだ自動車は、あぶない、

ということです。木でできた、古い小さなはしですが、もしこのはしがなかったら、どんなにふべんなことでしょう。このまえ、はしがいたんで、わたれなくなったとき、たろうくんたちは、ずいぶん遠くをまわらなければなりませんでした。

となりのおじさんの話では、はしにも、いろいろなものがあるということです。かんたんなまるき

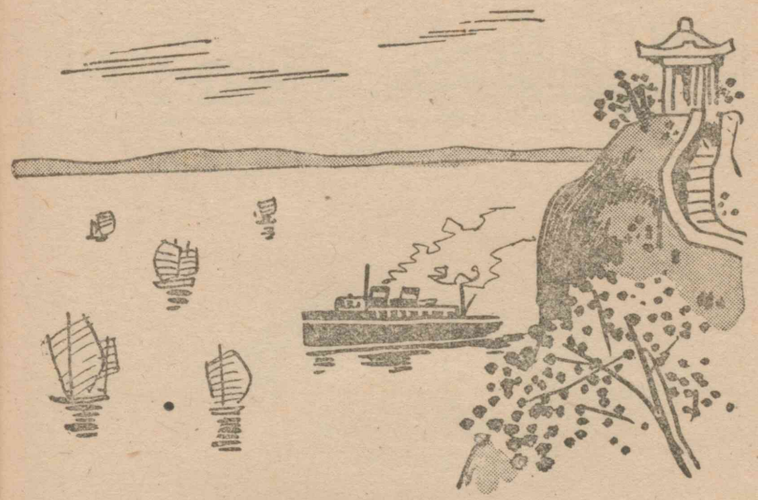






ばしもあれば、ゆらゆらゆれるつりばしもあります。てっきょうのように、たいらなものもあれば、たいこばしのように、まるくそったものもあります。なかには、船の通るとき、われてふたつにひらく、めずらしいはしもあります。

むかしは、東海道の大井川など、はしがないので、にんぷが、かごのようなものをかついで、わたしたりしました。いまでも、中國の



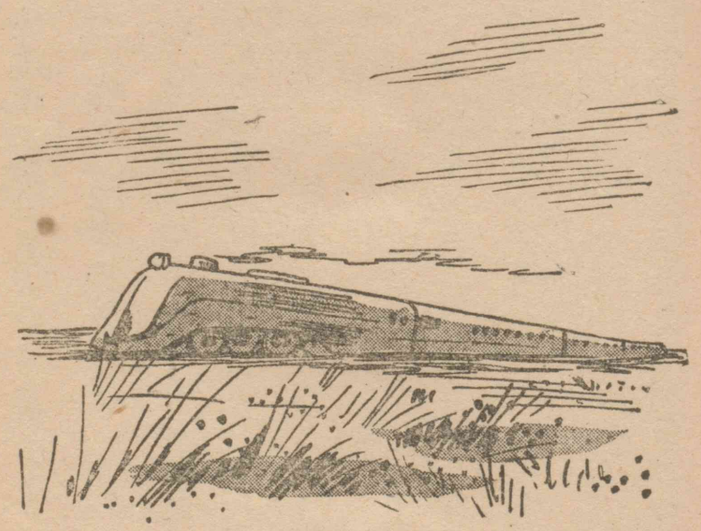
揚子江

揚子江のように、はしをかけることのできないほど、はばのひろい川は、船を使ってわたります。

そのような大きな川では、汽船も、じゅうぶん通ることができるのです。日本には、大きな船がさかのぼることのできるような川はありません。しかし、あまり大きくない船なら、むかしから、べんりな乗りものとして、川をゆききしていました。

船は、汽車や電車にくらべれば、そくりょくが小さいのですが、おもいものがたくさんつめますし、また水の上には、りくのように、じゃまものがないのでべんりです。

「満州」にいくと、どこまでもどこまでも、みわたすかぎり、ひろい野原だ。汽車は、そのまんなかを、まっすぐに走っている。だから、そくりょくもでるし、ゆれたりすることも、すくなくてすむ。もっとも、せんろのはば



外國の鉄道

も、日本のよりひろいのだがね。」

おじさんは、そういって、外國の鉄道の写眞をみせてくれました。トンネルをくぐったり、谷をわたったり、日本の鉄道は、ずいぶんおもしろい旅をさせてくれますが、そのかわり、そんな場所にせんろをしくためには、たいした苦労があったわけです。

（四）

みつこさんのおとうさんは、むかし、外國がよいの船の船長をしていらっしゃいました。だから、おうちには、外國のいろいろな土地の絵や写眞が、どっさりあります。船のもけいも、かざってあります。おとうさんの船がよる外國のみなとに、にいさんがひとつひ

とつしるしをつけた、大きな世界ちずも、かべにはってあります。

たろうくんは、みつこさんの家へあそびにいくと、いつも写眞ちょうやちずをみました。おかあさんやにいさんにきいて、この絵はどこの絵だろうかと、その土地の名をちずでしらべてみることもあります。おまつりの絵はがきなどには、たいへんおもしろいのがありました。かおのいろも、きているものも、住んでいる家も、たろうくんたちのとは、すっかりちがっていましたが、たいこをたたいたり、おどりをおどったりして、たいそうたのしそうです。

「やあ、こんなにあつい毛がわのがいとうだよ。」

「まあ、大雪じゃないの。ずいぶんさむい國のおまつりね。」

「動物の毛がわをきるなんて、おもしろいなあ。」

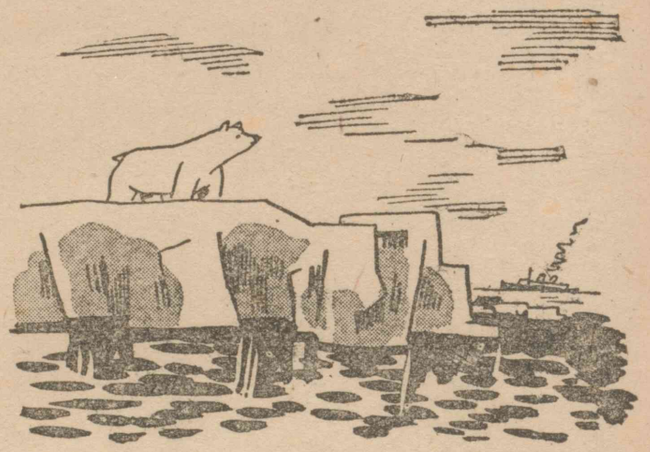
「おとうさんも、もってるわ。さむい土地では、みんなきるんですって。」

「そうだ。いつか、となりのおじさんもそういってたよ。れいかなん十ど となると、どうしても毛がわがいるんだって。」

「ほっきょくは、さむいでしょうねえ。どんな家に住んでるのかしら。」

「ほっきょくには、りくはないよ。

寒い國のおまつり



なんきょく

人も住んでいないって。ぼく、このあいだ、おじさんにきいた。なんきょくには、りくがあるんだよ。

なんきょくは、あついだろうなあ。」

「まあ、たろうさん。なんきょくもさむいのよ。こおりでいっぱいなのよ。わたし、知ってるわ。写眞があったわ。」

「だって、南じゃないか。北はさむくて、南はあついよ。どうして、南がさむいんだい。」

「わけはわからないわ。でも、たしかにさむいのよ。にいさんにき

いてみましょう。きっと、わたしのかちよ」。

（五）

たろうくんは、みつこさんのへやにかけてある、大きながくの絵がすきです。それは、ひろびろとしたくらい海の上に、あかるい光をなげかけている白いとうだいの絵でした。岩だらけの小島に立っているとうだいのねもとには、あらあらしい大波がおしよせて、そのしぶきが、雨のようにはねかえっています。遠くには、波とたたかいながら、みなとにむかっていそいでいる汽船がみえます。

「ボーッ、ボーッ」。

きっと、汽船は、きてきをならしているにちがいありません。星

もない、まっくらな夜の海では、とうだいのあかりだけがめじるしになります。

「ずいぶんあかるいんだろうなあ。あんなひろい海をてらすんだもの」。

たろうくんは、とうだいがみたくてなりません。

「とうだいは、どれもみんな、ちがった光のだしかたをするんですって。だから、あれはどこのとうだいだってことが、すぐにわかるのよ」。

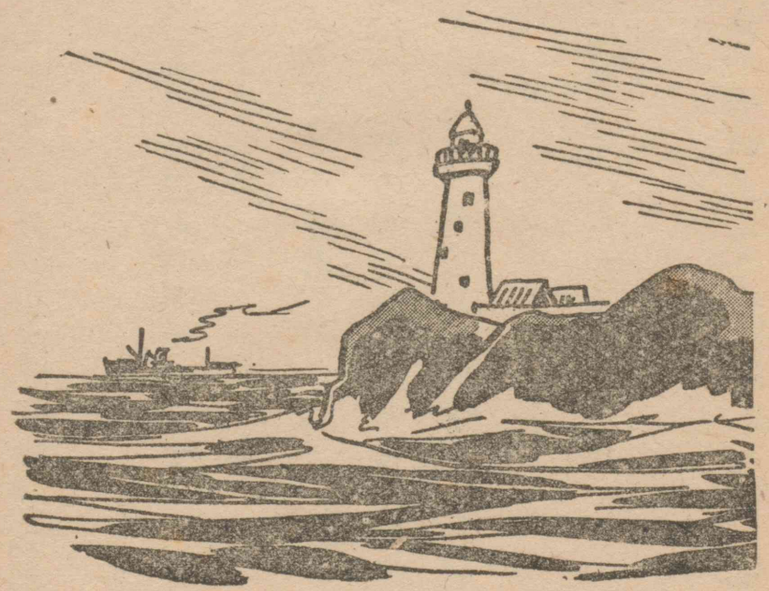
みつこさんは、よくおとうさんに話していただくので、なかなかくわしく知っています。

「あのなかに住んでいる人、きっと、ずいぶんさびしいわねえ。あ

んなに岩ばかりのはなれ島なんですもの。こどももいるかしら。

「ゆだんをして、あかりをつけわすれたらたいへんだね。光がみえなかったら、いちだいじよ。船が岩にのりあげてしまうわ。なんせんよ。」

とうだいをまもる、とうだいもりのやくめは、世の中の人たちにも、あまり知られな



いで、まいにちせまいところから、海ばかりながめている、めだたぬしごとです。そのうえ、かわったものをたべたり、おもしろいものをみたりするというたのしみも、すくないのです。しかし、もしとうだいもりがいなかったら、そして、きそく正しくあかりをともしてくれなかったら、どれだけたくさんの人がこまることでしょう。どんなに大きな汽船をつくっても、安心してこうかいをすることはできないでしょう。

たろうくんは、ふみきりばんのおじいさんのことを考えました。そして、汽車や汽船や、電車や自動車や、いろいろな乗りもののことを考えました。

日本の國でつくれないものは、遠い外國からはこんでもらわなけ

ればなりません。しかしそのかわり、日本でたくさんつくれるものは、外國へ送ります。それは、みんな汽船にのせるのです。

日本の國のなかでは、汽車や電車や自動車などではこびます。うしやうまをつけて、荷車ではこぶこともあります。

しかし、このような乘りものには、それをつくる人たちや、動かす人たちや、しようとつしたりしないように、いろいろなもちばをまもっている人たちがあります。ふみきりばん、とうだいもり、こうつうせいりのおまわりさん、みんないっしょうけんめいに、自分のもちばをまもっています。たろうくんやみつこさんは、いったい、どんなもちばをもっているでしょうか。

三　しんたいけんさ

（一）

きょうも　たのしく　がっこうへ、
みんな　そろって　でかけます。
ひばり　ないてる　おおぞらに、
おひさま　ぽかぽか　てってます。
カンカン　かじやの　おじさんは、
あさから　おせいが　でることね。
からの　にばしゃを　ひいてくる、
くろい　おうまも　おはようよ。

みちを　　よちよち　　あるいてる
めんどりさんも　　おはようよ。
きょうも　　たのしく　　がっこうへ、
みんな　　そろって　　でかけます。

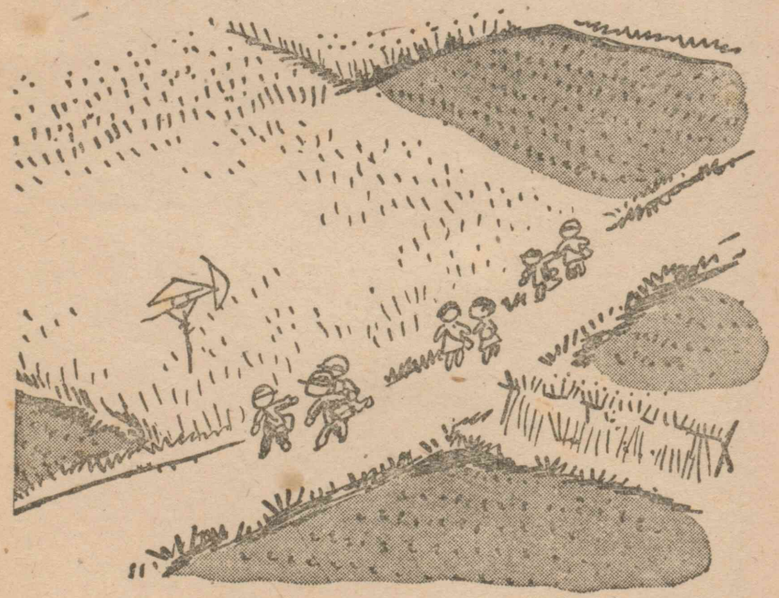
うつくしい秋の朝です。たろうくんは、うたをうたいながら、学校へいくとちゅうです。みつこさんとひでおくんがいっしょです。

たんぼのなかのほそい道をいくと、近道になります。もう、いねをかった田もあります。いねのほが、おもくたれさがっている田のまんなかに、ぼうしをかぶった、かかしが立っています。

かかし、かかし、一本足のかかし、
おかげで、ことしも、ほうさくだ。

ひでおくんが、大声でうたいました。かかしも、長いあいだ、雨や風にさらされて、くたびれているようです。

「あつかったり、さむかったり、雨が降らなかったり、降りすぎたり、大風もふくし、虫もつくし、そのうえ、すずめをおいはらうのでは、おひゃくしょうさんのしんぱいも、たえるときがないなあ。」



たらうくんは、いつかおじさんたちが話していたのを思いだしました。

「あら、山村先生だわ」

みつこさんが、すばやくみつけました。きょうはまだ、白いきものはきていませんが、むこうの火のみやぐらの下をいそいでいくのは、たしかに、えいせいがかりの山村先生です。みつこさんは、このはるごろまでは、よくかぜをひいたりしましたから、ずいぶんご心配をかけました。みつこさんは、山村先生がだいすきです。

「やあ、きょうは、しんたいけんさだよ。まえの週に、先生がそういってたよ」。

ひでおくんは、ぴょんぴょんとびあがって、たのしそうにあるき

ます。

「うん、こんどは、うんとふえてるぞ。せいだって、たいじゅうだって。みっちゃんはのびないなあ」

「まあ、ひどい。わたしだってのびたわ。これでも、一メートル二十センチあってよ」

ひでおくんは、もう、ずっとさきへいって、手をふってわらっています。

「やあい。ふたりでなにいってるんだよう。先生においつこうよう」。

たろうくんとみつこさんは、きょうそうでかけだしました。ひでおくんも走っています。

（二）

運動場は、もうこどもたちでいっぱいです。学校に近づくと、みんなのさわぐ声が、波の音のように、おしよせてきます。

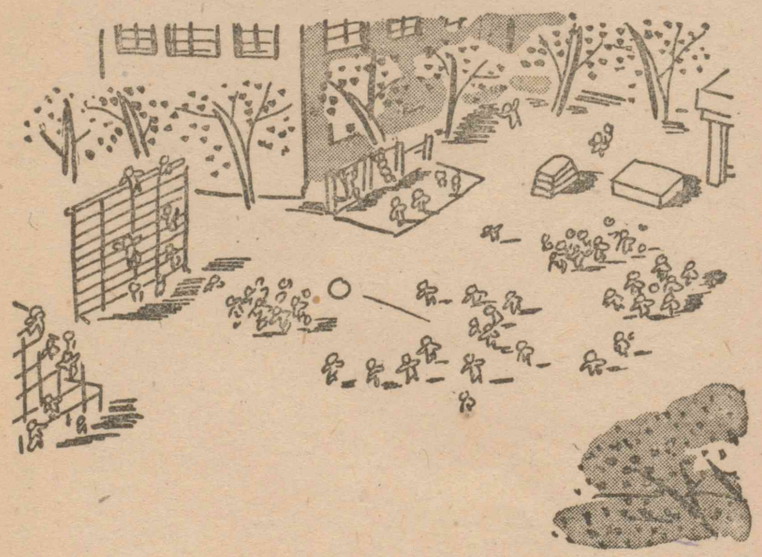
男の子は、まりなげをしています。おにごっこや、かけっこもしています。女の子は、なわとびやまりつきをしています。

たろうくんとひでおくんは、テニスコートのよこの、けやきの下へいって、やきゅうのなかまにはいりました。たろうくんはせめる組、ひでおくんはまもる組です。

たろうくんの学級では、やきゅうがたいそうさかんです。しかし、はじめのうちはまだ、きそくをよく知らないものが多かったので、

なかなかうまくあそべませんでした。あそびでも、きそくがはっきりしていて、それがしっかりとまもられなくては、たのしくやることができません。

そこで、みんながそうだんして、六年生の人におしえてもらいました。六年生は、しんせつに、きそくややりかたをせつめいしたうえ、けがをふせぐためのちゅういまでしてくれました。休み時間の運動



場では、ことに人が多いので、氣をつけていないと、けがをします。
みつこさんたちは、ろくぼくのうらで、なわとびをしています。
学級で、早くくる人のかおは、たいていみえるようです。
「みっちゃん、おはよう。あいかわらず、おねぼうね」
「もう、かねがなるかしら。」
「まだすこしあるわ。早くおはいりなさい。」
「かつこさん、きょうは、とてもよくとべるわね。」
かつこさんというのは、りんごのように赤いほっぺたをした、青リボンの子です。
「このあいだはいった水野さん、ちっともこないわねえ。このあそび場、知らないんじゃない。」

「きっとそうよ。なれないから、わからないのよ。さびしそうだったわ。」
「つれてきて、きょうから、いっしょにあそびましょうよ。——きっと、水のみ場のへんにいるわ。さがしにいかない。」
みつこさんは、なかまの二、三人と、水野さんをさがしにいきました。
運動場には、いよいよ人がふえてきたようです。

（三）

「カーン、カーン、カーン。」
かねがなって、じゅぎょうがはじまります。いちばんはじめの時

間の「こくご」がおわったら、やはり、しんたいけんさがありました。

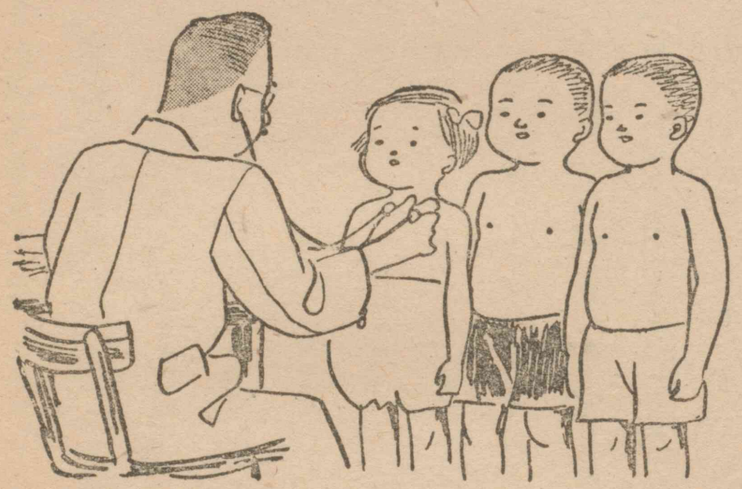
えいせい室の長いこしかけの上に、みんなおとなしくこしをかけています。うけもちの先生と山村先生が、ひとりひとりの名まえの書いてある紙を、そろえていらっしゃいます。

「やあ、みんな、しずかにまっているなあ」

にこにこわらいながら、おひげのおいしゃさんが、はいってこられました。

「さあ、じゅんばんに、きものをぬぐんですよ」

先生のさしずで、つぎつぎにはかってもらいます。せいの高さ、からだのおもさ、それから、むねのまわりです。書きこまれた紙をみると、グラフの表ができていて、まいつき、どれだけふえている



か、すぐわかるようになっていました。たろうくんたちが、このあいだから、自分たちでつくっているのと、よくにています。

おいしゃさんのまえにいくど、いろいろとやさしい声できかれました。先生がたも、よこから、いろいろせつめいをなさいます。とくによわい子は、あとでもういちど、ゆっくりみていただくことになりました。

とうとう、みつこさんのばんが、

まわってきました。

「大山さんだね。このごろは、もうかぜをひかない。それはよかった。どうれ、口をあけて。うん、なかなかよく、はをみがいている。よしよし、こんどは、したをだしてごらん」。

おいしゃさんは、書きいれた紙と、みんなのかおとをみくらべながら、ていねいにみてくださいます。

「ううん、村山くん。きみは、すこしかお色がわるいな。元氣がないぞ。おかあさんのつくってくださるものは、なんでもたべているかな。たべないものもある。それ、それ、それがいけないな」。

「おやおや、川田くんには、虫がいるようだ。ほかの人のおなかも、あやしかったようだな。きょうは、ぜひ、まくりをのんでもらう

ことにしよう」。

目のけんさもありました。きたないゆびで目をいじったりしていると、目に病氣がうつります。目の病氣はよくうつるので、おいしゃさんも、一かいごとに、手をしょうどくしていらっしゃいました。

（四）

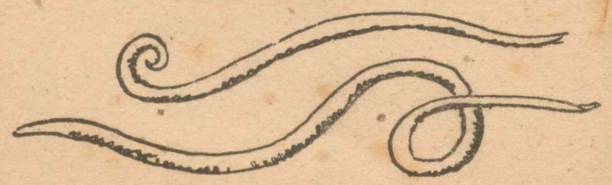
おひるべんとうをたべるまえに、まくり（海人草）というものをのみました。これは、海草からとったおくすりだそうです。ちょっと、においのある、お茶のようなものでした。

「まだのまない人はありませんか」。

先生が、ゆのみに、茶いろの水をついでいらっしゃいます。
「やあい、ひでおくん。まだ、もってあるいてるのかい。目をつぶって、のんでしまえよ。」
「わたし、もうのんだわ。」
「ぼく、そんなにきらいじゃないよ。」
「ちょっと、にがいね。」

みんな、がやがやさわいでいます。
まくりをのむと、おなかのなかにいる、かいちゅうという虫がよわって、からだからでてしまうのだそうです。せっかく、おいしい、じょうのあるものをたべても、おなかの虫に

たべられてしまうのでは、なんにもなりません。それに、わるいことには、自分では、なかなか虫のいることがわからないので、おとなでもこどもでも、へいきでいることが多いのです。いまの日本では、この虫のいない人はすくない、といってもよいほどだそうです。
ごごの時間は、おなかの虫の話で、もちきりでした。
「どんな虫だろう。きもちがわるいね。」
「ながあい、大きな虫だってさ。」
「そんな長い虫が、よくおなかにいるものだなあ。」
「きみは知らないね。にんげんのちょうは、とても長いんだぜ。」
「まくりをのまないでも、虫をなくせないものかなあ。」



かいちゅう

ひでおくんは、よほど、まくりがきらいのようです。

「そりゃあ、たべものをよくにればいいんだよ。でも、なかなかそうはいかないからねえ。おつけものだってあるし―。うん、やさいの葉をよくあらうのも、いいことだね。」

たろうくんは、このあいだ、おじさんにおしえてもらったので、よく知っています。

女の子たちは、目のことを話しています。山村先生のお話では、日本人には、めがねをかけているものが多い、ということです。

「うちのねえさんたち、ふたりとも、めがねかけているの。わたし、いやだわ、目をわるくするの。」

「くらいところで、本をよんだりしなければいいんでしょう。」

目をわるくするしせい

「電車のなかでよんだり、あるきながらよんだりするのも、わるいのよ。ねてよむのも、いけないのよ。」

「うちのねえさんは、空や海をみていたわ。ずっと遠くのものを、じっとみているのもいいんですって。」

「いちど目をわるくすると、なかなかなおらないそうね。」

「うちのにいさんは、かんゆを

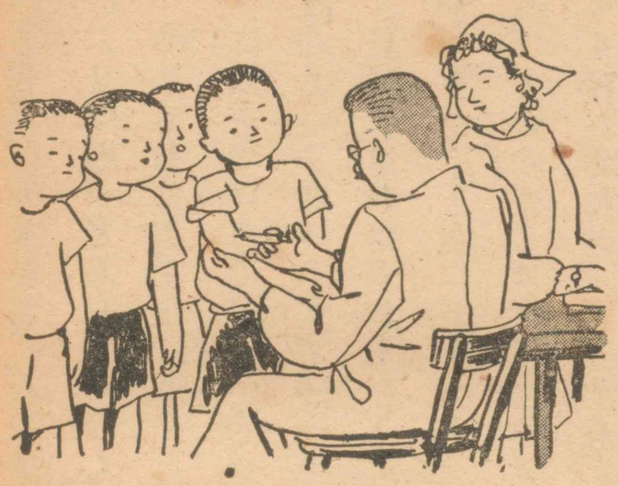
のんでるわ。」

となりのおじさんも、いつかかんゆをのんでいた、とたろうくんは思いました。

（五）

おなかの虫のことも、きんがんのことも、むしばのことも、また、たべものにすききらいがあるということも、自分のからだをじょうぶにしていくためには、すてておけないたいせつなもんだいです。しっかりした、つよいからだをもっていなければ、世の中の役にたつ人には、けっしてなれないにちがいありません。

しかし、たろうくんたちのように、みんながまいにちかおをあわ



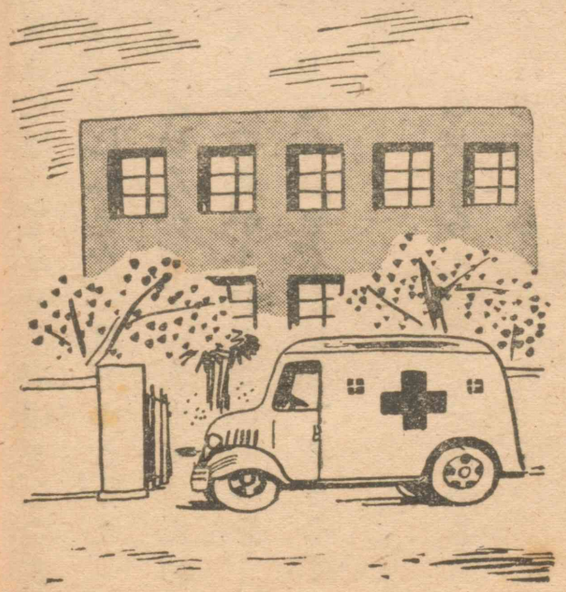
せて、いっしょにくらしているときには、でんせん病ほど、こまる病氣はないでしょう。ばいきんは、目にみえないほど小さくて、どんどんひろがっていきます。人から人へ、病氣がうつっていくのを、どうしたらふせぐことができるのでしょう。

このおそろしいでんせん病をふせぐために、むかしから、ずいぶんたくさんの人たちが、苦心に苦心をかさねて、くふうをしてきました。いまでは、たいていの病氣のよぼうち

ゆうしゃができます。みんなが心をあわせて、いっしょうけんめいにふせげば、どんなでんせん病でも、おそろしくはありません。

けれども、まずなによりも、こんなおそろしい病氣をださないように氣をつけるのが、いちばんよいと思います。ばいきんがかおをだすような、すきをつくらないようにすればよいのだ、と思います。

そのためには、どうすればよいのでしょうか。そのひとつは、ばいきんにまけ



びょういん

ないような、つよいからだをつくることです。もうひとつは、どんなところに、ばいきんがでてくるかを知って、そんなことにならぬように、からだをせいけつにしておくことです。からだだけではありません。たべものも、きものも、すまいも、きれいにしておくことです。

では、そのためには、どうすればよいのでしょう。それが、いま、たろうくんやみつこさんの考えているもんだいです。

「よく日にあたって、運動をしよう。

きれいな空氣をすおう。

そとから帰ったときには、うがいをしよう。

食事のまえには、きれいに手をあらおう。

はをよくみがこう。
食物をよくかもう」。
みんなは、先生やおうちの人、それに、おいしゃさんやかんごふさんにもそうだんして、こんなふうなきそくを、いくつかつくろうと思っています。それが、しっかりまもれたら、きっと、みんながじょうぶになれるでしょう。
そして、学校にきているどのこどもも、また、まちの人も、みんなじょうぶになっていくことでしょう。

四　おるすばん

（一）

たろうくんは、きょうは、おるすばんです。さっきから、えんがわで、絵本をみています。くるはずのみつこさんが、なかなかこないので、ちょっと、いらいらしているところです。
「リーン、リーン、リーン」。
おや、電話のベルがなっています。あいにく、だれもいません。
たろうくんは、まだ、電話にでたことがないのです。
「リーン、リーン、リーン」。
ベルは、なりつづけています。さあ、どうしたらよいのでしょう。

思いきって、ててみましょうか。それとも、なりやむまで、たまっていましょうか。たろうくんは、たいそうまよっています。

とうとう、たろうくんは、ゆうきをだしました。電話の下までいきました。ところが、電話は高いところにあるので、とどきません。

小さいいすをもってきて、その上にのりました。ベルは、あいかわらず、なっています。

いつも、おかあさんがやるのを思いだして、左手で、じゅわきをはずしました。くぼんでいるほうを、耳にあてます。

たろう「もし、もし」。

すこし声が小さいようです。

たろう「もし、もし、どなたですか」。

あいて「もしもし、野村さんでいらっしゃいますか。大山でございますが―」。

とつぜん、女の人の声がきこえます。

たろう「はい、たろうです」。

あいて「まあ、たろうさん。えらいわねえ。おかあさまはおるすなの」。

電話のむこうで、おばさんがびっくりしているようです。

あいて「たろうさん。きょう、みつこがおじゃまするともうしましたが、みつこは、すこしねつがあるので、さきほどから、やすませているのですよ」。

おばさんは、みつこさんがこられないことをつたえるために、わざわざ電話をかけてこられたのです。

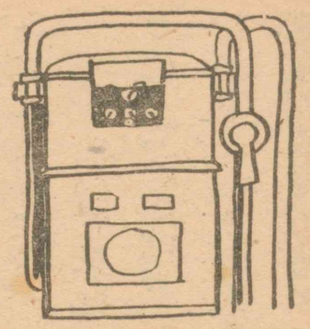
たろう「さようなら。おだいじに。」

たろうくんは、話がすむと、そっとじゅわきをかけました。おおしごとがすんだようなきもちです。

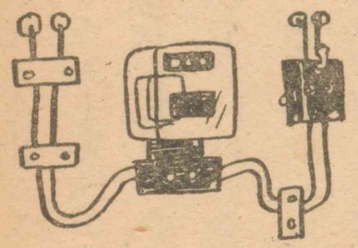
（二）

えんがわで、みけとあそんでいたら、電とうがいしゃの人がきました。いきなり、ろうかのかべのところへいって、せのびをしながら、かいちゅう電とうで、てらしています。

たろうくんが、ふしぎに思ってみていると、その人はわらって、



ガスのメートル



電氣のメートル

「やあ、こんげつは、五十キロですね。」といいました。メートルをしらべにきたのです。

電氣は、メートルをみると、数字がでているので、いくら使ったか、すぐわかるのです。電氣を使うと、そのぶんりょうだけ、数字が大きくなるようになっています。

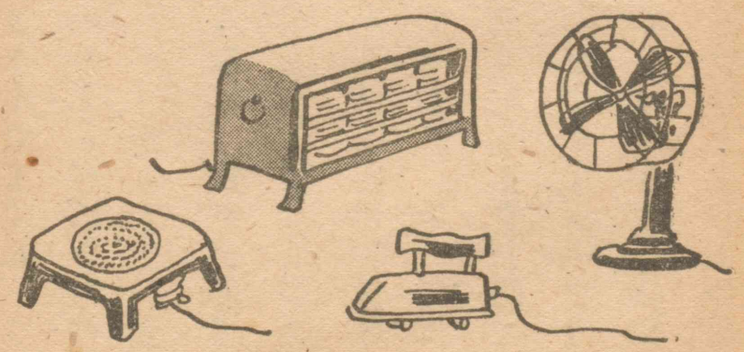
家には、電とうがやっつあります。門とうをいれると、ここのつになります。いまは、電力がすくないので、でんねつきは、ほとんど使いません。電氣アイロンも、おしいれの

なかに、しまってあります。

「どしどし電氣が使えるようになって、なんでも電氣の力でやれるようになったら、どんなにいいことでしょうね。」

と、おかあさんは、ときどきいわれます。そうなったら、おかあさんも、どんなに手がはぶけることでしょう。

しかし、電氣は、たいへん役にたつかわりに、ちゅういぶかくとりあつかわないと、けがをしたり、火事をおこしたりします。電氣が火事のもとになることは、ひじょう



家で使う電氣のきかい

に多いそうです。

「きのうの火事は、ろう電だったってね。」

「なあに、電氣ごたつをつけわすれたんだそうだよ。」

「なにしろ、火のまわりかたが早かったうえに、じゅうぶん水の用意がなかったというからね。」

きのうも、学校の帰りみち、たろうくんは、そんな話をききました。

たろうくんの家では、ガスも使っています。ガスのメートルは、電氣のとちがって、小さなはりがまわるようになっています。ガスは、人がすうと、ひじょうにどくですから、使わぬときは、よくせんをしめておくように、氣をつけることがたいせつです。

石炭がたりないので、いまは、ガスもじゅうぶんにありません。電氣も、石炭を使っておこすことがありますが、日本ではおもに、水力電氣といって、ながれのきゅうな、大きな川の水を使って、おこしています。川の水をせきとめるダムは、そのためにつくられているものです。

（三）

おかあさんが、帰ってこられました。おもそうなふろしきづつみをおろすと、すぐだいどころの方へいかれます。

「たろうさん、よくおるすばんをしましたね。だれもきませんでしたか。」

さっそく、ゆうごはんの用意をされるのでしょう。お米をとぐのか、いきおいよく、水道の水のながれでる音がしています。

「さっき、電とうがいしゃの人が、メートルをみにきたの。」

「まあ、そう。それだけ。」

「それからね。さっき電話がね。」

たろうくんは、おかあさんをびっくりさせたくて、みけをひざからおろすと、おおいそぎで、だいどころへかけつけました。

「まあ、電話が—」

おかあさんは、まだきものもきかえないで、たすきがけです。たろうくんが、とくいになってせつめいすると、

「たろうさんも、えらくなったのね。電話にでられるようになった

の。おとうさまにおみせしたかったわ。」

しんみりしたちょうしで、そういわれました。せんちにいって、とうとう帰ってこなかったおとうさんのことを、たろうくんは、よくおぼえています。

大きな手で、だっこでもするように、いつもあたまをなでてくれたおとうさん。かみの毛がのびると、バリカンで、ゴリゴリかってくれたおとうさん。

おとうさん。たろうは、おかあ

さんをおたすけして、しっかりべんきょうします。そして、おとうさんにまけない、正しい人になります。

おとうさんがなくなられたあと、おかあさんが、どんなに苦労をして、自分をそだてていてくださるか、たろうくんには、よくわかっています。たろうくんが元氣だと、おかあさんはよろこばれます。おかあさんがよろこばれると、たろうくんはうれしいのです。

「みっちゃんは、病氣だって。」

「いけないわねえ。きっとかぜよ。このごろは、よる、ずいぶんひえるから。」

たろうくんは、のどがかわいたので、おかあさんから、お水をコップに一ぱい、いただきました。水道の水は、よくしょうどくして

あるので、そのままのんでも、からだをこわしません。まどのあかりにすかしてみると、うっすらと青い水が、コップのガラスごしに、きらきら光っています。ひいやりとした、おいしい水でした。

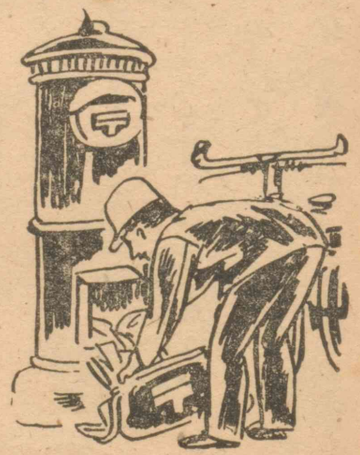
（四）

あくる朝、たろうくんは、いつもよりすこしはやめに、みつこさんをさそいました。風のない、くもった日です。

みつこさんの家のまえで、ゆうびんはいたつのおじさんにあいました。おじさんは、黒い大きなかばんを、

赤いじてん車につけて、あちらこちらと、手紙をくばってあるいています。みつこさんの家にも、はがきを二、三まいいれました。

たろうくんが、学校へいくまでには、ポストがみっつあります。火のみやぐらの下にあるポストでは、朝いくとちゅうで、よくポストのおなかから、はがきや手紙をとりだしている、ゆうびんはいたつのおじさんにあいます。ちょうどそのじこくが、あつめる時間にあたっているのでしょう。そのおじさんは、たいそうふとっていて、いまあった、くばる人とはべつの人です。



みつこさんの家は、門のうちがわに、小さなうえこみがあります。たろうくんが、げんかんのまえでよぶと、いきなり、よこのまどがあいて、みつこさんがくびをだしました。

「なあんだ。もういいの。」

「きのうはごめんなさい。もう、すっかりいいのよ。」

みつこさんは、あいかわらず、目をくりくりさせています。

「いま、ごはんがすんだところなの。すぐいくわ。」

「きょうのほうそうは、とてもおもしろいそうだよ。」

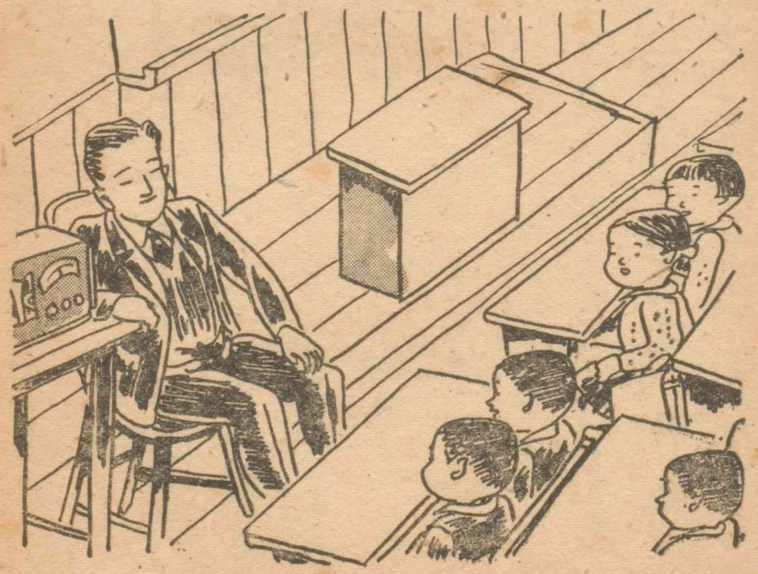
まい週一かい、組のものがみんなできくラジオのほうそうを、たろうくんは、たいそうたのしみにしているのです。

たろうくんは、まいばん、家でもラジオをきいています。こども

の時間でも、むずかしくてわからないところは、よこでしごとをしている、おかあさんにききます。

ニュースも、だいじなことは、おかあさんが、かんたんにして、わかりやすく話してくださいます。

しかし、学校でみんながいっしょにきくラジオは、家できくのとちがって、またおもしろいものです。きいているうちに、わらいだす人もあります。ためいきをつく

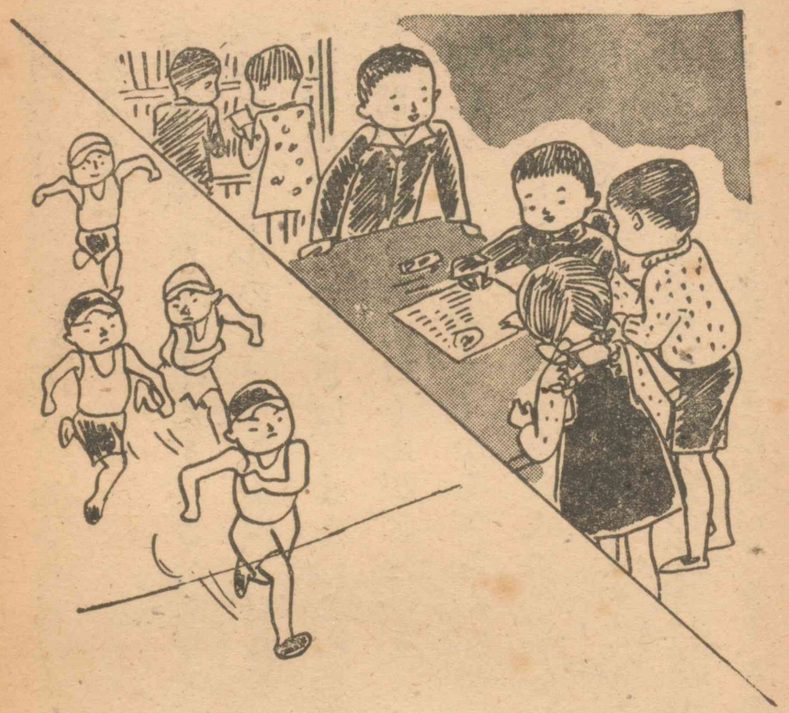


子もあります。それに、知っているうたでもあれば、みんなで、がっしょうしたりします。

ほうそうがおわると、あつまって話しあってみます。おもしろいお話などは、みんなで、いろいろな役になってみて、たのしいげきをすることもあります。そんなときは、紙のきものをきたり、教だんをぶたいにしたりしてやるのです。

（五）

教室のうしろの黒ばんには、先生がまいにち、あたらしいできごとを書かれます。たろうくんたちも、ときどき書きます。紙に絵や文を書いてきて、はりつけることもあります。これが、たろうくん



の学級のかべ新聞です。

ラジオで、いつ、どんなほうそうがあるかということも、たいてい、この新聞でわかります。えんそくのときにも、ゆくさきのことや、いろいろなちゅういが、ここに書かれました。いまはちょうど、運動かいのまえで、あ

まり書くことが多いので、大きな紙に書いて、かべいっぱいにはってあります。

「リレーは、ひでおくんがいるから、きっとかつよ」

「五十メートルのきょうそうは、だれがいちばんかなあ」

「運動かいのせいせきは、また、この新聞に書こう」

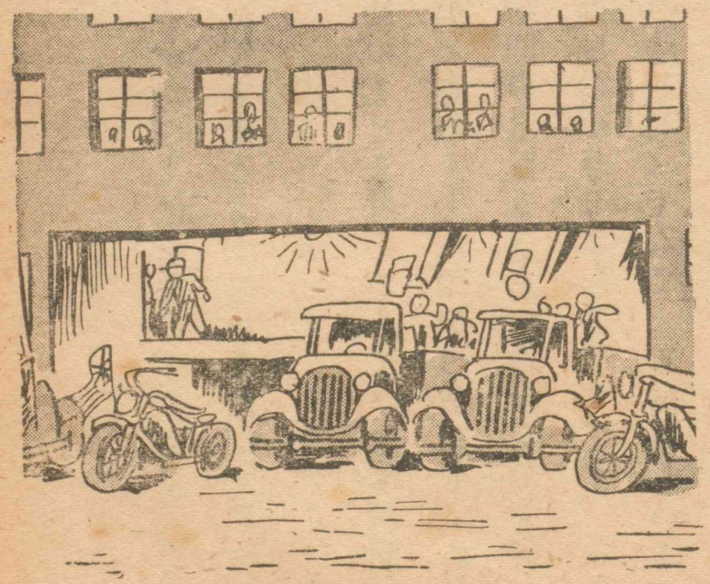
新聞のかかりの田口くんが、たいそう、いきごんでいます。

組にかべ新聞ができてから、みんなが、自分の家のきんじょにおこったできごとや、おうちの人にきいたおもしろいことがらを書きつけるので、休み時間にそれをよむのがたのしみです。

しかし、書く場所がせまいので、ほかの人もよく書けるように、氣をつけて書きます。そのせいりをするのが、新聞かかりの田口くん

と井川さんの役です。これは、ひとつきこうたいになっています。

わたくしたちの家には、まいにち、新聞がとどきます。そのおかげで、その日その日の大きなできごともわかりますし、天氣よほうや、はいきゅうのこともわかります。遠くで、きのうおこったことが、もう、写真まではいって、のせてあるのには、おどろきます。もし、新聞がなかったならば、たいそうふべん



新聞のつみだし

なことでしょう。

「おかあさん、この写真なあに。」

新聞をよんでいるおかあさんのかたごしに、たろうくんは、よくのぞきこんだりします。早く自分でよめるようになりたい、といつも思います。

たろうくんは、学級のかべ新聞のことを考えてみて、かべ新聞でもやっぱり、ひじょうに役にたつと思いました。かべ新聞も、みんながうまく使えば、りっぱに、新聞のはたらきをするからです。

たろうくんも、近いうちに、新聞のかかりになるはずです。そのときには、新聞のことを、いろいろしらべてみて、あたらしいこころみをしたいと考えています。たとえば、新聞のなかから、めずら

しい写真を切りぬいてきて、はりつけてみるのもおもしろいでしょう。ほかの学級や上級生の教室をみてあるいたら、そのほかにも、きっとよい思いつきがあるにちがいありません。

あたらしいできごとを知らせてくれるものには、新聞のほかに、ラジオがあります。そして、ふつうラジオは、新聞より、もっと早くつたえてくれます。しかしラジオは、ききのがしてしまうと、もうまにあいません。新聞のように、あとまでとっておくこともできません。そのかわり、ラジオは、じっきょうほうそうのように、できごとを、すぐそのまま知らせることができます。やきゅうのほうそうがあるときには、ラジオをかけている店のまえで、人がくろやまのようにあつまっているのもみられます。

新聞もラジオも、それから、ゆうびんや電話も、そして、電氣もガスも水道も、どれもこれも、わたくしたちが生きていくために、ひつようなものです。そういうものがあるために、わたくしたちの生活は、どんなにべんりになっていることでしょう。

しかし、まだラジオをきけない人たちもいますし、水道やガスや電話をひくことのできないところも、たくさんあります。たろうくんは、自分がおとなになったならば、もっともっとべんりな、住みよい世の中にしたいと考えています。

五　はくぶつかん

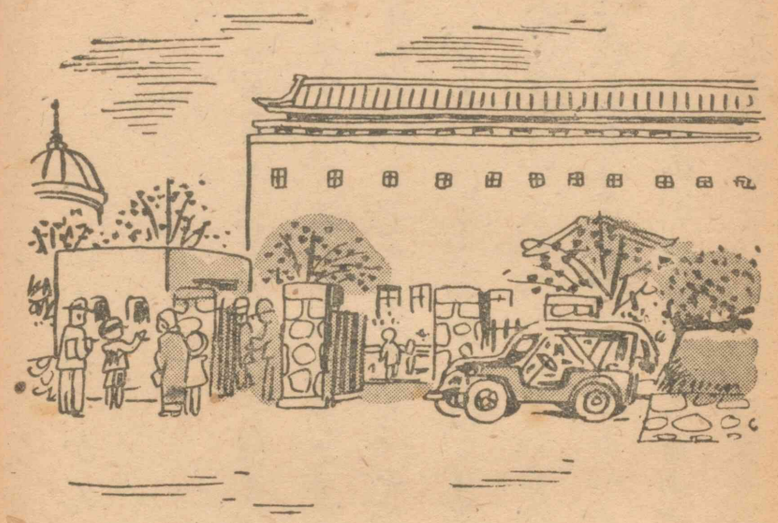
（一）

となりのおじさんが、はくぶつかんにいかれるというので、たろうくんは、みつこさんをさそって、つれていっていただくことにしました。おじさんはわらって、

「うん。はくぶつかんは、まだむりかな。帰りには、動物えんにもよろう。」

といわれました。

きょうは、学校が休みなので、おべんとうをもって、朝からでかけます。いくつか電車を乗りかえて、やっと、はくぶつかんのある



町につきました。

はくぶつかんは、大きな森の近くにある、きいろい二かいだてのたてものです。おじさんは、入口で、きっぷを買いました。

門をはいって、いけのふちの、うつくしいにわを通っていくと、りっぱなげんかんにでます。秋の日が、いっせいにふりそそいでいるにわでは、はるばるいなかからでてきたらしいおじいさんが、石にこしをおろ

して、休んでいました。きょうは、ふだんより、人がすくないのだそうです。

入口から、すぐ右のへやにはいりました。

てんじょうが高くてあかるい、大きなへやです。ガラスの戸だながいくつもあって、そのなかに、いろいろなものがならべてありました。

「これは、おおむかしの人が使ったどうぐだ。それ、石のおのがあるだろう。このつぼは、みんな、土でつくってあるのだよ」

おじさんが、ゆびさす方をみると、もようのはいった、おもしろいつぼが、いくつもありました。石のおのというのは、石をこすって、はのところをうすくしたものだそうです。

まだ、ぐあいのよいざいりょうも、べんりなきかいもなかったころですから、このようなものをつくるのにも、どんなにほねがおれたことでしょう。

「こんな古いものを、だれがいままでもっていたのでしょう。」

みつこさんが、おじさんにたずねています。

「そうそう、これはね。土のなかから、ほりだされたものなのだよ。おおむかしに人が住んでいたところからは、いまでも、よくほりだされることがある。」

「まあ、よくこわれなかったわねえ。」

「ああ、ぼく、思いだしたよ。いつか、学校のかべ新聞にでていた。静岡けんで、ほりだされたって話ね。」

「たろうくんは、よく知ってるなあ。ごらん、静岡でほりだされたものが、もうここにきているよ。」

おじさんは、そういって、つぎのへやにはいっていきました。

(二)

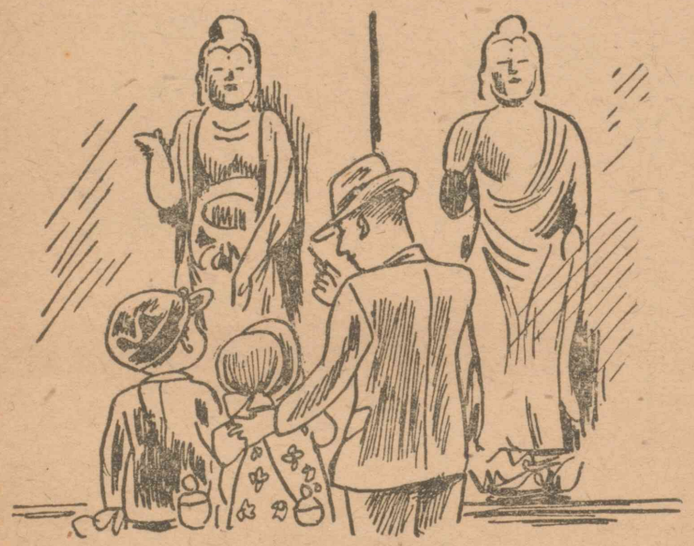
つぎからつぎへと、へやがつづいています。古いものがおいてあるので、いためないようにと、空氣のしめりぐあいにまで、氣をつけてあるのだそうです。みている人たちもしずかなので、ガランとして、ものおとひとつしません。

一かいには、おおむかしのどうぐのほかに、むかしの人のつくった、みごとなかたなや、すずりばこのようなぬりものがありました。どれも、名人といわれた、すぐれた人たちのつくったものです。

いろいろなかたちの、ほとけさまもありました。木でつくったものや、かねでつくったものがあります。大きなのは、ガラスの戸だなのそとにおいてありました。

「はくぶつかんでは、ならべてあるものに、手をふれてはいけないよ。くる人がみんなさわったら、せっかくだいじにしてあるものが、いたんでしまうだろう。」

おじさんは、にこにこしていわれます。たろうくゝは、びっくりして、ほとけさまのだいの方へのばしていた手をひっこめました。



「あれは、奈良にある、ゆうめいなおてらのほとけさまだ。やさしいおかおだろう。こくほうになっているよ。」

「おじさん、こくほうというのはなに。」

たろうくんが、ねっしんにききます。

「こくほうというのはね。日本の國では、むかしこんなものを使っていた、また、こんなりっぱなものができた、ということを、

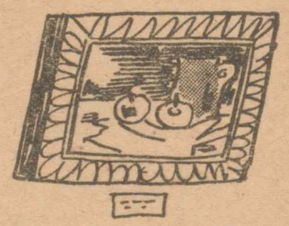
のちのちまでつたえることができるように、だいじにとっておくもののことだ。そうしないと、きっと、こわれたり、なくなってしまったりするだろう。ここにあるほとけさまは、みんな、千年以上もむかしのものだが、こくほうになっているものはすくないよ。」

ひとまわりしたら、すっかりつかれました。それで、きゅうけい室で、ひと休みすることにしました。

（三）

二かいには、絵があります。

「まあ、あんなにさけているわ。ずいぶん古い絵ね。」



みつこさんは、いつものように、目をくりくりさせます。

「これは、すみで書いてあるわ。たろうさんのおうちの、とこのまの絵とにているじゃないの。」

「学校のずが室にかけてある絵とは、ずいぶんちがうなあ。」

おじさんの話によると、すみ絵は、むかし、中國からわたってきたものだそうです。

「中國の人が書くのと、西洋の人が書くのとでは、おなじものを書いても、ずいぶんちがった書きかたをするだろう。遠くはなれて住んでいると、

こんなにまでちがってくるのだねえ」。

これは、絵ばかりではありません。おんがくのことを考えてみても、たいそうちがっています。みつこさんは、ねえさんのならっているおことと、ラジオできくオーケストラとをくらべてみて、なるほどと思いました。

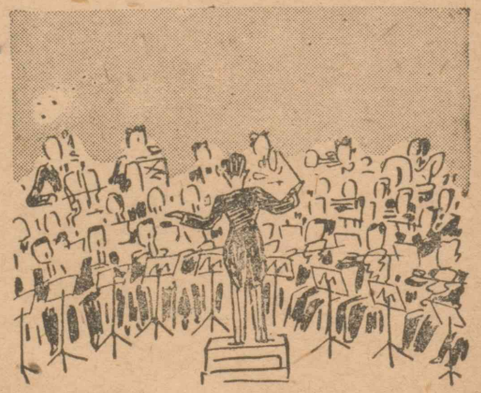
そのつぎのへやには、すみで書いた、字のかけものがあります。まるで、おどっているような、いきおいのよい大きな字もあれば、こまかく、きれいにならんだ字もありました。日本や中國では、むかしから、ふでとすみを使っていますが、

西洋では、ペンとインキで書きます。

せとものをならべてあるところも通りました。大きなおさらのなかに書いてある絵がおもしろいので、ふたりは、ガラスの戸にかおをおしつけて、のぞきました。こんなにうつくしいせとものも、土をやいてつくるのだときいて、びっくりしました。

くたびれたので、なか休みをすることにしました。ちょうど、おひるになります。

「おじさん、そとのしばふで、おべんとうたべようよ」。



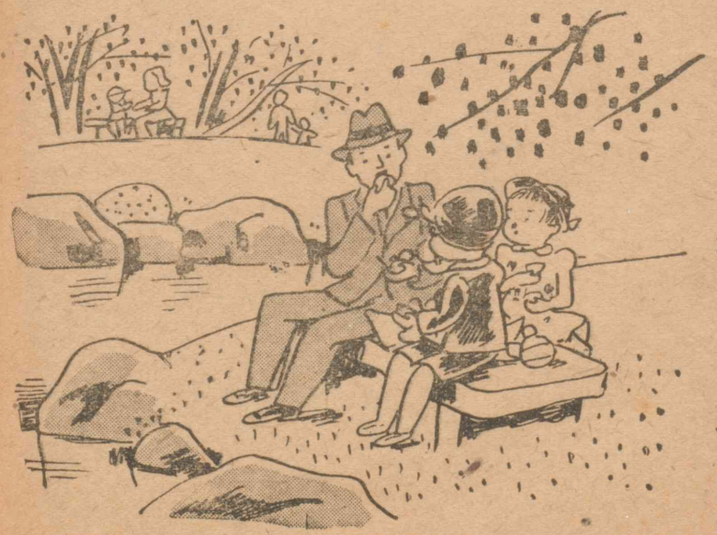
オーケストラ

たろうくんは、まっさきに、大きなかいだんをかけおりていきます。

いけのそばの、石のこしかけにねころんでいると、すみきった青い空を、ゆうゆうと、雲がながれていきました。

「むかしの人もえらいわねえ。汽車も電車もなかったのにねえ。」

とつぜん、みつこさんは、ほっぺたをおさえて、ためいきをつきました。



「電とうだってないさ。まいにち、てい電とおなじだぜ。」

たろうくんは、大きなおむすびをほおばりながらこたえます。

いけのふちに、はとがまいおりて、よちよちあるいているのがみえます。水の上に、かれたはっぱが一まい、ぽっかりうかんでいます。

ごごは、動物えんにいくのです。

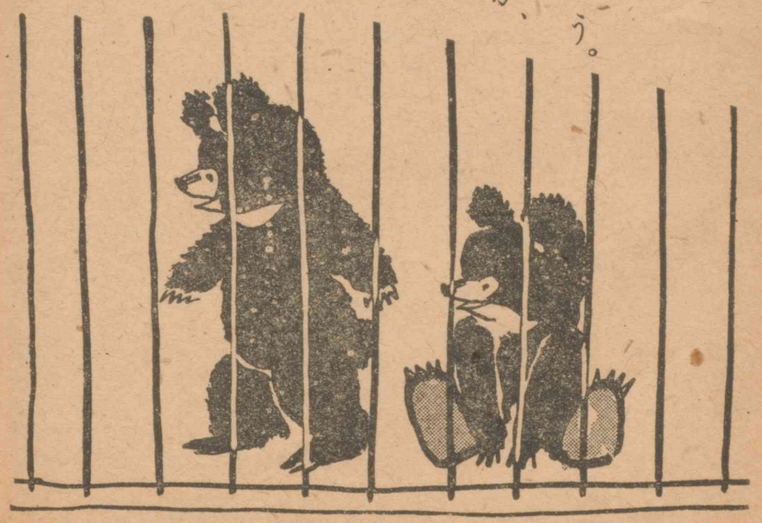
（四）

チッチ、パッパ、キイ、キイ、キイ。

ことりのおうちは、青いうち。

小ぞうのおやどは、まるいやね。

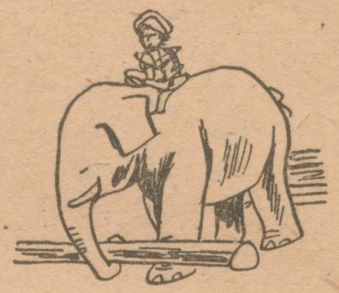
赤いおしりの　さるさんも、
白いおくびの　つるさんも、
いっしょに　おひるをたべましょう。
かわいい　こぐまのあかちゃんが、
ひなたぼっこをしています。
「やあ、くまがひるねをしているよ。
「どれどれ。あの、くびのところに
白いわのはいっているのが、月の
わぐまというんだよ。
くまのおりのまえは、こどもでい
っぱいです。



「おじさん、白いくまはいないの。
「そうだね。ここにはいないようだね。むかしはいたのだがね。
「なぜ、白いのと黒いのとがあるの。
「白ぐまのすんでいるところは、まっ白いゆきやこおりでうずまっ
た北の國だ。白いところに、黒いくまがいるのでは、すぐみつか
ってしまうだろう。
「おもしろいなあ。じゃあ、てきにみつからないようにするんだね。
「ゆき國のうさぎは、すんでいる場所のようすで、色がかわるよ。
ゆきがあるときは白いし、ゆきがきえると、茶色になる。
たろうくんは、ぞうがだいすきです。大きなからだのくせに、か
わいい、小さな目をもっています。長いはなが、するするとのびて

は、えさを口にもっていくのが、ゆかいでなりません。

「ぞうは、力がつよいから、よくならして使うと、たいへん役にたつ。外國には、ぞうを使って、おもいものをはこぶところもあるよ。」



おじさんがそういったとき、ぞうがきゅうに、ドシンと足ぶみをしたので、みつこさんは、びっくりしてとびあがりました。

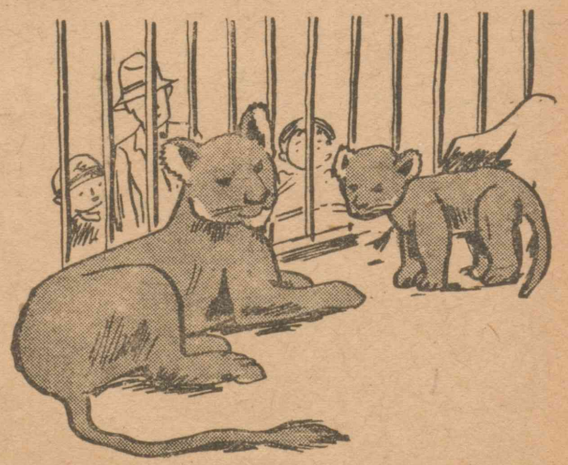
ライオンがほえています。いってみると、小さなライオンのこどもが、えさをほしがってないているのです。おりのところに立ちあがって、せのびをしてまっています。そのようすが、ちょうど、こいぬのようで、たろうくんもみつこさんも、たいそうかわいらしく

思いました。おやのライオンは、こどもたちのうしろをぐるぐるまわって、わるいことでもするものはいないか、とみはっています。

ライオンのおりのうらに、くびと足の長い、のっぽのきりんがいました。みあげるように、せいの高い動物で、足もたいそう早いそうです。

こどもたちが、石をなげて、いたずらをしているので、おじさんがちゅういをしました。

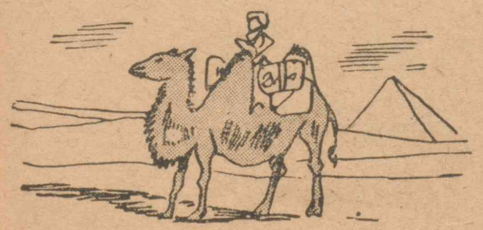
そのとなりは、せなかにこぶのあるらくだです。さばくといって、



はてしもなくひろいすな原にすむ動物で、そこを旅する人たちは、荷物をらくだのせなかにのせて、はこぶのだそうです。からだは、うまより、すこし大きいように思いました。

わしやたかのおりの近くに、すいぞくかんがありました。ここには、いろいろなさかながいます。ガラスの水おけのなかで、大きなさかなや、小さなさ

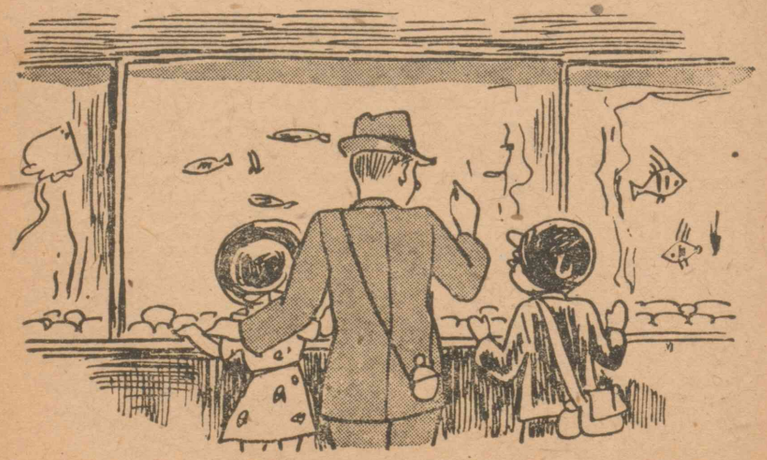
(上)きりん



(左)さばくをあるくらくだ

かなが、ゆっくりとおよいでいました。ひれが、きらきら光って、きれいです。海のそこにおりたら、きっと、こんなふうにみえるかもしれません。

すいぞくかんをでたところに、大きなくじらのせぼねが、ならべてありました。二十メートル以上もあるという、大きなものです。きっと、遠い南の海をおよいでいたのでしょう。たろうくんは、いつか先生にきいた、いさましいくじらとりの話を思いだしました。



（五）

動物えんをでるころには、もうそろそろ、日がしずみそうでした。ぞろぞろと、人が帰ってきます。おじさんにきいてみると、

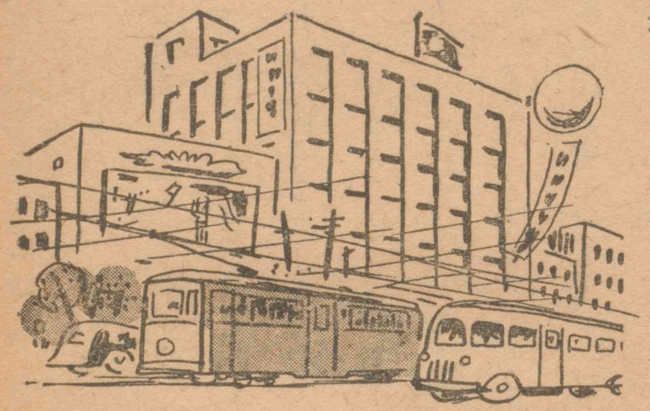
「あれは、絵のてんらんかいがおわったのだ。あすこにみえるのが、びじゅつかんといって、絵をならべて人にみせるところだよ。」

とおしえてくれました。

町にでると、もうぽつぽつと、あかるいひがみえます。電車が、人をいっぱいのせて、ゴーゴーと通りすぎていきます。

「やあ、あの大きなたてものはなあに。」

たろうくんがゆびさす方をみると、八かいもある、しかくい大きなたてものです。一かいの、どうろにむかったところには、すばらしいかざりまどがあります。



ひゃっかてん

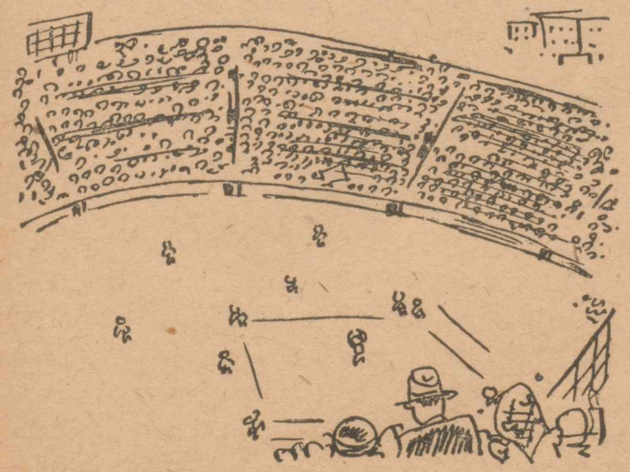
「あれは、百貨店だよ。なんでも賣っている、大きな店だ。あのなかには、しょくどうもあるし、とこ屋や写眞屋まであるよ。たろうくんは、まだいちどもいったことがないのかい。」

「わたし、中町のにいったわ。てっぺんに、あそび場があって、おもしろかったわ。」

百貨店のとなりには、げきじょうやえいがかんがならんでいます。そろそろはじまるじこくなのでしょう。人があつまっています。

おつとめをおわった人たちは、ここで、一にちのつかれをわすれ、あたらしい元氣をとりもどすのです。うちのおかあさんも、いちどいけばよいのに、とたろうくんは思いました。たろうくんたちは、ときどき、学校でえいがをみます。

帰りの電車のなかから、やきゅうじょうをみました。せいの高い、大



きなけんぶつせきがついていて、遠くからみると、まるで、大きなまるいおしろのようにみえます。

みつこさんははじめてでしたが、たろうくんは、もう二三どきたので、よく知っています。あんな大きな場所が、けんぶつ人でまんいんになったら、どんなにすばらしいだろう、とみつこさんは考えました。

はくぶつかんもどうぶつえんも、げきじょうやきゅうじょうも、それがあるからといって、たべものやきものがふえるわけではありません。たりない家がたつわけではありません。けれども、もし、そういうものがなかったら、人々の生活は、どんなにつまらないものになるでしょう。

だれもがたのしくくらしていくために、このようなせつびは、ぜひなくてはならないのだと思います。そして運動場やこうえんなども、もっともっとたくさんできるとよいと思います。

小さなこうえんが、あちこちにできたら、家のたてこんだ町のなかの人たちは、どんなにうれしいことでしょう。こどもたちが、道ばたであそんでいて、けがをするようなことも、きっとなくなるにちがいありません。

六　海べの町で

（一）

たろうくんは、おかあさんといっしょに　いなかの町へいきました。ここは、おかあさんの生まれた町です。

町は、かいがんにあるのですが、鉄道は、すこしはなれた山のてを通っているので、駅からバスに乗りました。

しばらく雨が降らないとみえて、白くかわいたどうろからは、しきりに、ほこりがまきおこっています。道のりょうがわには、たんぼがつづいていて、ところどころに、おひゃくしょうのすがたがみえます。町へはこんでいくのでしょう。やさいをリヤカーにいっぱ

いつんだ、じてん車が走っていきます。
町へはいると、きゅうに、にぎやかになりました。いろいろな店がみえます。道ばたには、よく日にやけた、元氣そうなこどもたちが、たくさんいます。
バスは、小さなはしのてまえでとまりました。おりると、すぐ目のまえを、ゆっくり川の水がながれています。どこからともなく、しおのにおいがしてきます。
「おや、おかあさん。この川、どっちになながれているの。」
たろうくんは、ふしぎに思ってたずねました。川の水は、すこしずつ、山の方にむかって、ながれていきます。
「まあ、たろうさん。よく氣がついたのねえ。この川も、いつもは、

海の方へながれているのよ。でも、すぐ近くで海になながれこんでいるものだから、海の水があがってくるときには、それにおされて、ぎゃくになながれることもあるのです。ほら、この水は、海のにおいがしているでしょう。」
「ほんとうに海の水があがってくるの。」
「そうよ。たろうさん、いつか、かいがんであそんだとき、波のくる場所が、朝とひるとでは、ずいぶんちがったじゃありませんか。おぼえてる。」
「ふうん。」
たろうくんは、くびをかしげて考えこみました。
ふたりのあるいていく道ばたの家には、さかなをずらりとならべ

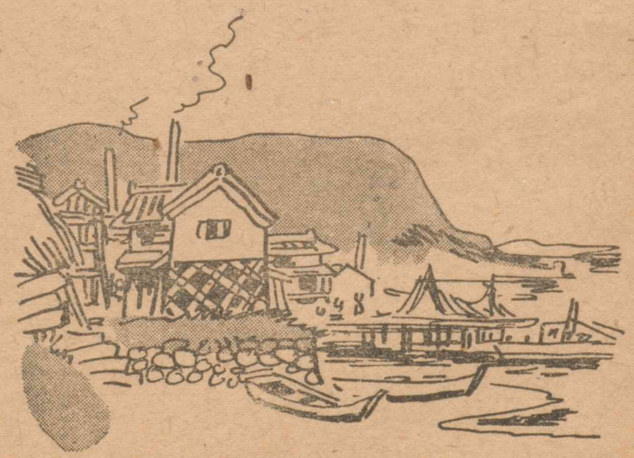
て、ほしてあるのが、目につきます。ぷんと、りょうし町らしいにおいがします。

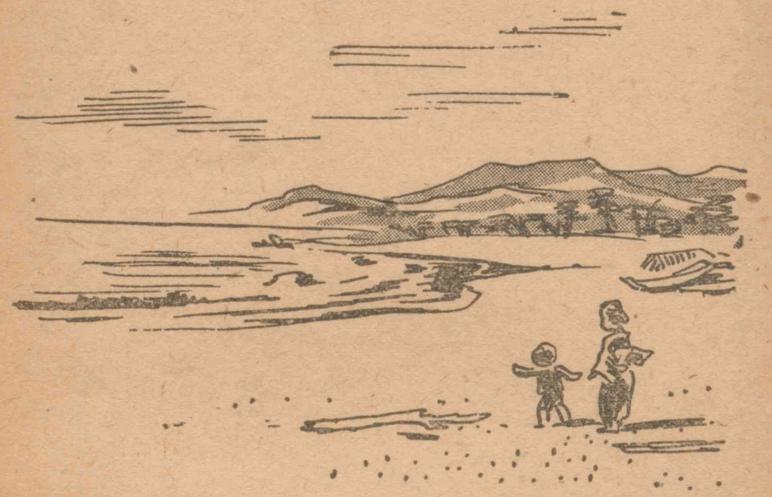
だんだん、かいがんが近くなってきました。しかし、波の音は、まだきこえてきません。大きなあみをほしてあるところも通りました。

やっと、まつ原にでました。青いうつくしい海がみえます。

「やあ、海だ。」

たろうくんは、まっすぐに、すなはまの方にかけだしました。お





かあさんも、うれしそうについてこられます。

海は、たいそうしずかでした。波うちぎわにいってみると、小さな波が、チャポンチャポンと音をたてていました。すなのなかに、きらきら光るかいがころがっています。

ふたりは、すなの上に、こしをおろしました。遠くの方に、うっすらとみえているのは、きっと大きな島でしょう。ふりそそいでいる日の光

で、うつくしくかがやいている水のむこうに、小さな船のうかんでいるのもみえます。

「おかあさん、あの船、なにしてるの。」

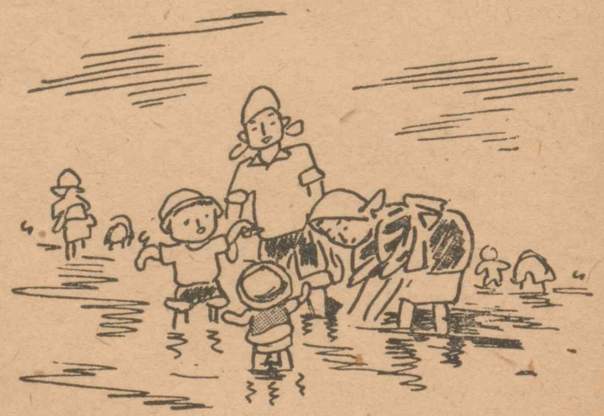
「さかなをとっているのですよ。りょうしさんが、大きなあみでとっています。」

「どんなさかなをとるの。大きいのもとるの。ぼく――まえに、海でおさかなとったねえ。」

たろうくんは、まだ学校にあがらないまえ、つれていってもらった、しおひがりのことを思いだしました。そうです。そのときには、海の水がずっとおきまでひいて、たくさんの人が、はだしでかいをひろっていました。たろうくんも、おとうさんにてつだってもらって、かいをみつけたり、小さなさかなをすくったりしました。

「わかったよ、ぼく。おかあさんのさっきいったこと。海の水がにげてしまうと、いつかのしおひがりのときみたいになるんだねえ。いまみたいだと、かいがひろえないもの。」

おかあさんは、にっこりして、たろうくんのうわぎのえりをなおしてくださいました。遠い水のむこうに、ぽっかりと、白いまるい雲がうかんでいます。



しおひがり

（二）

あくる日から、たろうくんは、まいにちかいがんにでてみました。海の空氣は、すがすがしくて、たいそうよいきもちです。

このあたりは、すこし入りこんで、わんになっているので、右ての方には、青いまつ林の丘が、海のなかに、ぐっとつきでています。青い林のなかで、ところどころ、うすあかくみえるところは、きっと、もみじでもあるのでしょう。白くつづいているすなはまの上には、りょうをしている人たちのすがたが、ぽつぽつと、黒い点をうったようにみえます。

波うちぎわでは、じびきあみという大きなあみを、男の人も女の

人も、こどもたちまでで、いっしょうけんめいにひいているのをみました。ひきあげたあみのなかには、大きなさかなや小さなさかなが、ぴちぴちはねていました。

「えんやらほう、えんやらほう。」

じびきあみのかけ声は、ずっとむこうのはまからもきこえてきます。

あるとき、たろうくんが、すこし西の方のかいがんまでいってみ

ると、まつ林の近くで、さかんに白いけむりがあがっていました。ふしぎに思って近よってみると、小さなこやがふたつあって、大きなかまをたきつけています。

おもしろくなってのぞいていると、ひとりの男の人が、かごにいっぱい、白いものを入れて、でてきました。なかなかおもそうにみえます。

おや、おさとうかしら——と、たろうくんは思いました。

思いきってたずねてみますと、海の水から、しおをとっているのだ、とせつめいしてくれました。しお水をたいて、水けをとると、あんな白いしおができるのだそうです。おさとうだと思ったのは、しおだったのです。

たろうくんは、これまで、海の水のしおからいことは知っていましたが、りょうりに使うしおが、こうしてつくられるということは、きょうはじめてわかりました。

これはきっと、みっちゃんも知らないぞ、とたろうくんは、すぐ知らせてやりたくなりました。

しおは、しおからくて、あまりありがたくないような氣もしますが、帰って、おかあさんにきくと、人のからだには、ぜひなくてはならない、ひじょうにたいせつなものだということです。

（三）

おかあさんの生まれた家の近くには、小さな工場があります。ここへは、まいにち、たくさんのさかなが、はこばれてきます。工場では、なまのさかなに、いろいろと手をくわえて、またどんどん送りだしています。

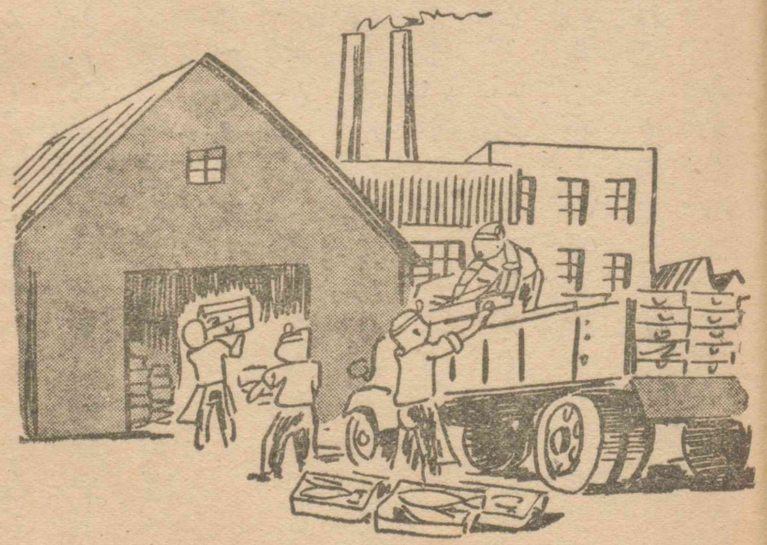
なまのさかなは、そのまま、遠くの町まではこばれていくと、きせつによっては、とちゅうでくさったりすることがありますから、とれるとすぐほしたり、しおにつけたり、くんせいにしたりするのです。

こうしておけば、長い日かずをかけて、遠いところへ送っても、

わるくなる心配がありません。ことに、かんづめにしたものなどは、外國にまで送られていきます。

たろうくんは、まいにち、りょうをしている人たちのようすをみるのがたのしみでした。そして、目のまえでとれたさかなをみるのが、たいそうゆかいでした。

としおくんやみつこさんと、いつか町へいったときは、とうとう、とかいの魚いちばをみにいけませ



さかなの工場

魚いちば

んでしたが、こういうところでとれたさかなが、かもつ列車やトラックで、どんどん町のいちばへはこばれるのでしょう。

とかいで、店にならんでいる、ほしざかなやくんせいも、みんな、こういうふうにしてとれたものが、いろいろと手をくわえられ、いろんな人の手を通って、はこばれていくのでしょう。

たろうくんは、かいがんへきた

おかげで、どんなふうにして、さかなが町の人たちの手にはいるのか、よくわかったような氣がしました。

さむい風のふく冬がやってきても、りょうしたちは、つめたい水にぬれながら、さかなをとっています。なかには、なんにちも家をはなれて、小さな船に乗りくみ、あら波とたたかっている人たちもあります。それは、どんなになれたしごとであったにしても、けっして、やさしいことではないでしょう。

（四）

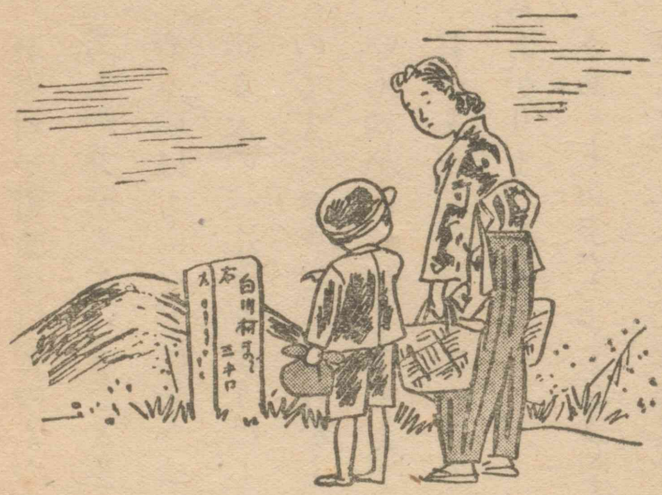
この町から、小さな山ひとつこしたとなりの村には、いとこのとしおくんが住んでいます。たろうくんは、おかあさんとふたりで、

としおくんの家へあそびにいくことになりました。

よくはれた秋のごぜんです。ふたりは、海にそった道を、ゆっくりあるいていきました。しばらくいくと、道が山のてにまがって、だんだんのぼりになります。いつのまにか、まわりに家がすくなくなってきました。

さかなを買いにいくのでしょうか。大きなかごをせおった、わかい男の人といきちがいました。近くの山から切ってきたのでしょう。たきぎをいっぱいつんだ、にば車にもであいました。

のぼり道が長いので、たろうくんは、ときどき道ばたで休みました。大きな木のねもとにある石にこしかけていると、どこかで、谷川の水のながれる音がきこえるようです。



「まあ、ごらんなさい、たろうさん。あすこに、道しるべの石がありますよ。村まで三キロと書いてあるわ」

おかあさんが、大きな声でいわれたので、たろうくんはびっくりしました。

「道しるべってなんなの」

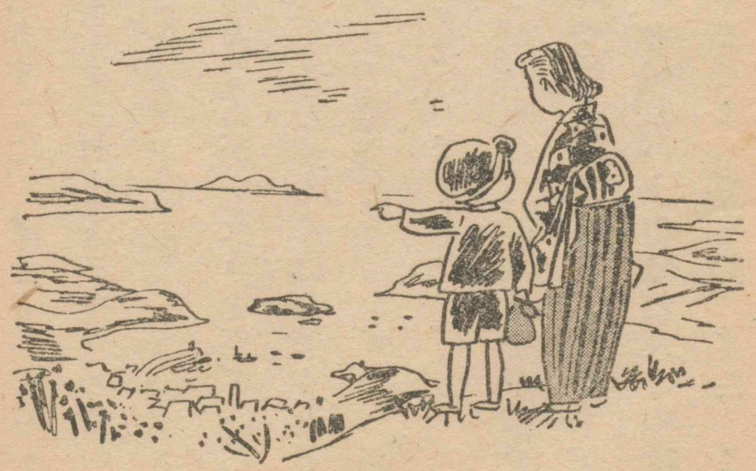
みると、その石には、字がふかくきざみつけられているようです。

「道しるべというのはね。この道をいくとどこへでるか、また、ここ

から村や町まではどのくらいのみちのりか、ということを、石や木のはしらなどに書きつけて、通る人のべんりなようにしたものです。きっと、これからも、いくつかみつかりますよ。」

おかあさんは、そういって、立ちあがりました。

「さあ、もうすぐ、とうげですよ。そこで、おべんとうにしましょうね。」



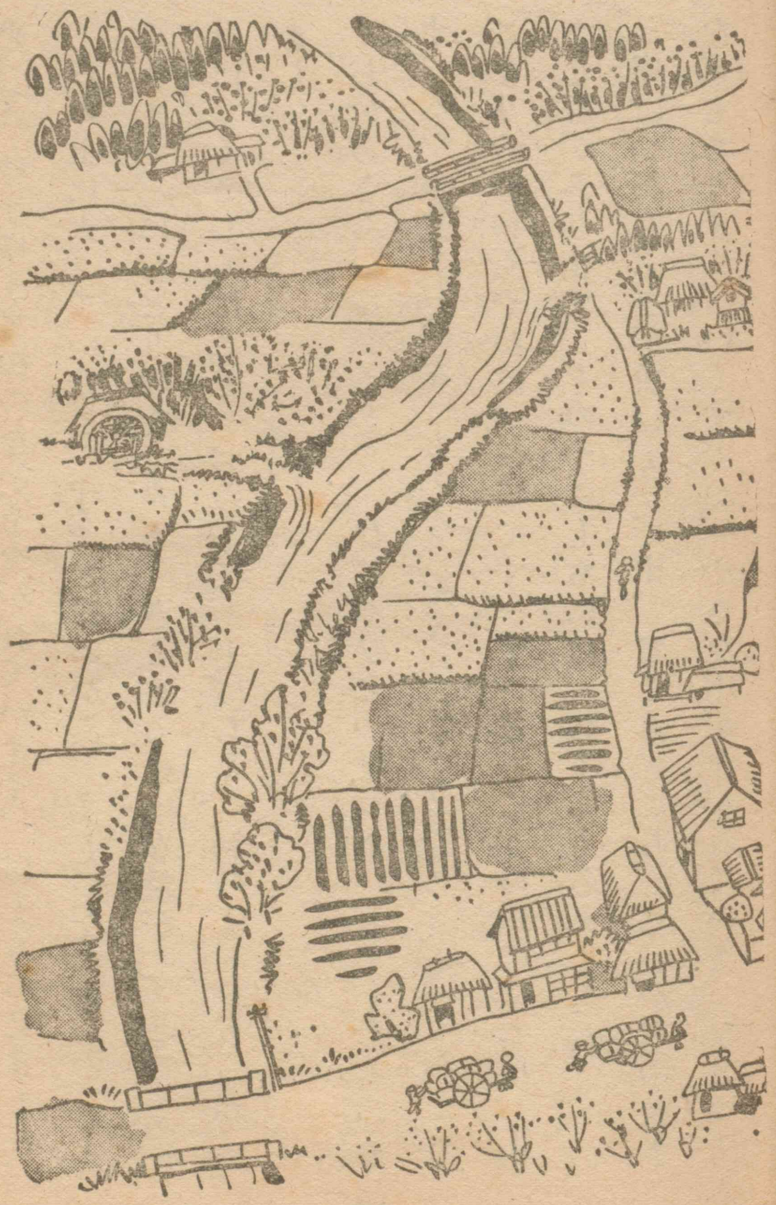
道は、だんだんけわしくなります。

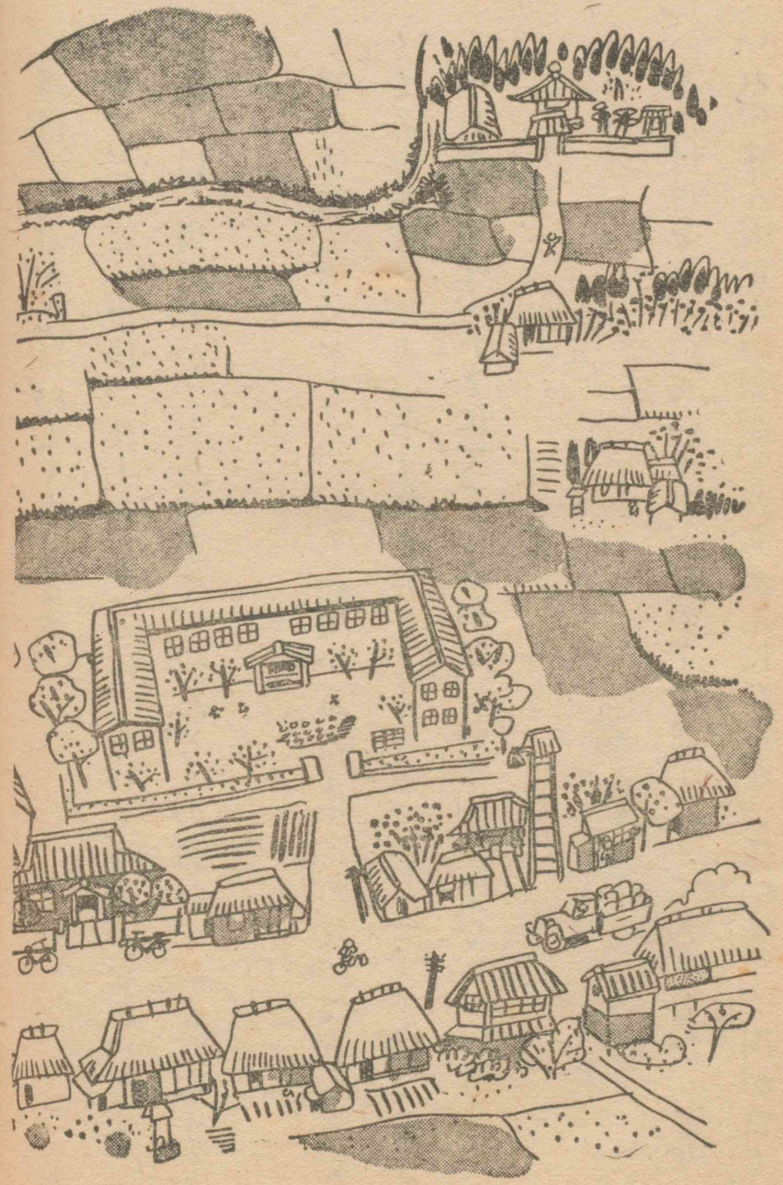
やっと、とうげにでました。ここは、たいそうよいながめです。ふたりは、海にむかった丘の上で、べんとうのおむすびをたべました。

目の下に、青々とした、ひろい海がみえます。のぼってきた方がくをみおろすと、りょうし町のたてこんだ家々が、マッチばこをならべたようです。おきにでている船は、点のように小さくみえます。

（五）

とうげ道をあるいていくと、目の下に村がみえてきました。とりいれのすんだひろい田が、いちめんにひろがっています。川が白く





光って、ゆうゆうと田のなかをながれています。はしもみえました。

丘の上に立っていると、ずっと遠くから、うしのなく声がきこえてきます。にわとりのなく声も、きこえるような氣がします。ふたりは、くさむらにこしをおろして、しばらく、村のようすをながめました。

おかあさんがゆびさして、ひとつひとつせつめいしてくださいます。火のみやぐらの左にみえる、大きなたてものは、学校です。そのとなりのかわらやねは、役場です。ずっとむこうの川のふちに、小さな森があります。そのすこし右には、おてらもみえました。

家は、わらぶきが多いようです。ところどころ、白いかべの大きな家もあります。いくすじか、小さな川がながれていて、ひとつふ

たつ、水車があるのもみえます。きっと、この川から、田へ水をひくのでしょう。

としおくんの家は、学校のすぐ近くだそうです。むかいに、ちゅうざいじょがあるということですが、それは、ここからではわかりません。学校や役場のあるあたりは、いくらか家がこみあっているようですが、そのほかは、あちらこちらに、ぽつぽつと、のうかがみえるくらいです。人通りも、あまりありません。

たろうくんは、山のすぐ下の道を、米だわらをつんだ荷車が二だい、学校の方へむかっていくのをみつけました。おもそうに、あとをおしている人のすがたもみえます。

「おかあさん、あのお米、どこへはこぶの。」

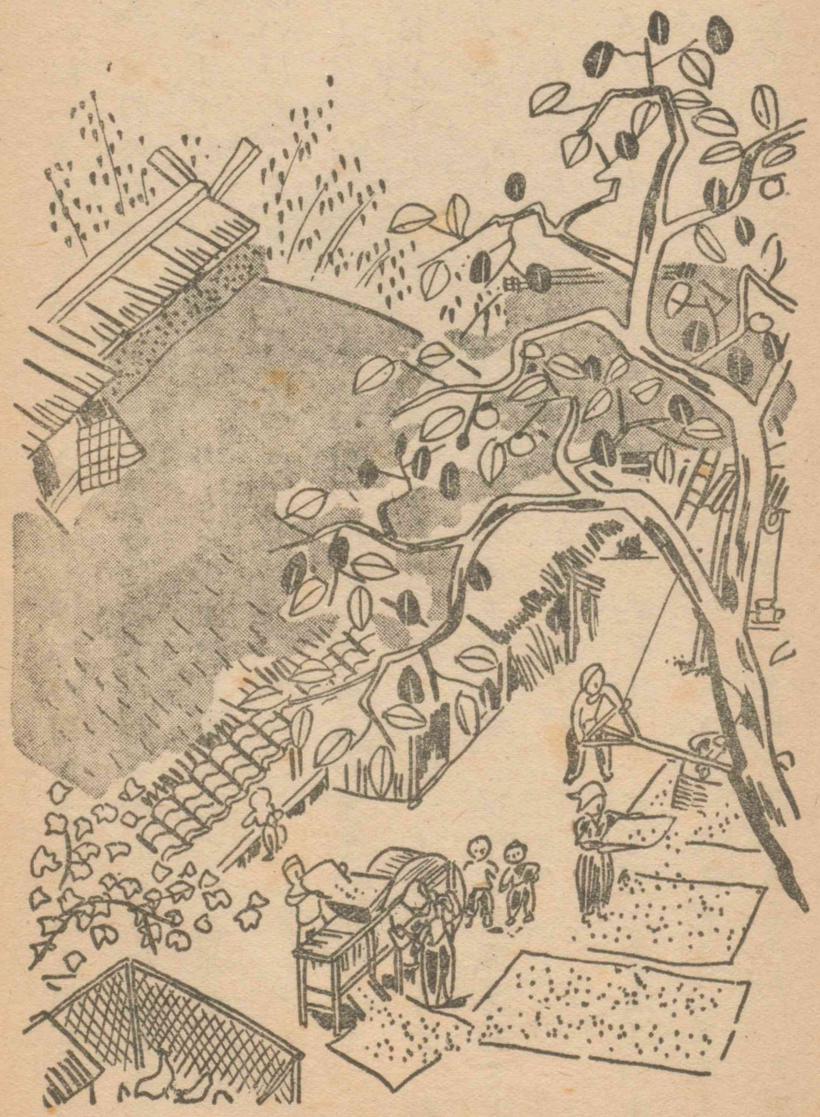
「そうですねえ。なんのお米でしょう。そうそう、きっときょうしゅつかもしれないわ。それなら、たぶん役場へでもはこぶのですよ。」

きょうしゅつの米は、役場のかかりの人が、しなものとめかたをしらべ、ごうかくしたものをまとめて、送りだすのだそうです。

とりいれも、すっかりおわりましたし、もう、きょうしゅつがはじまっているにちがいありません。

（六）

さかをおりていくと、もうぽつぽつ、のうかがあります。どの家も、町の家とはちがって、家のまえに、小さなひろばのような、ひ

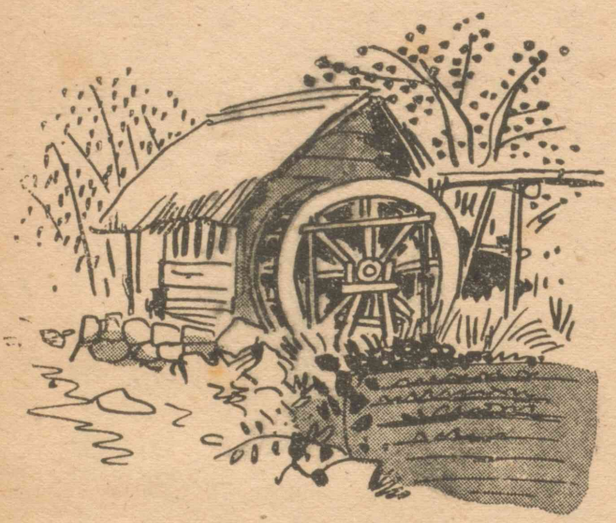


ろいにわをもっています。きょうしゅつの用意をしているのでしょう。男の人も女の人も、このひろにわで、いそがしそうにはたらいています。どのにわにも、むしろの上に、もみのついた米が、いっぱいほしてあるのが目につきました。

まだ、だっこくきで、いねのほから、もみのままの米つぶを、うちおとすしごとをしているところもありました。もみがらをえりわけるきかいを、使っているところもあります。ブーンと風をおこして、もみがらをとばしているのがみえます。

女の人たちも、なれた手つきで、たのしそうにしごとをしています。たろうくんは、めずらしいので、なんども、たちどまってみました。そして、ずいぶんべんりなきかいを使っているものだ、と感

心しました。こういうきかいは、たいてい、きょうどうで使っているのだそうです。



せいまいじょ

「あれで、すぐたべられるお米になるの。」

「いいえ、あれだけでは、まだもみがついていますから、せいまいじょへもっていって、きれいなお米にしてもらうのですよ。」

しかし、もみをとってしまうと、もちがわるくなるので、の

うかでは、すぐ使わない米は、そのまましまっておくそうです。

せいまいじょは、電氣を使っているのもあります。また、水車を使っているのもあります。山の上からみた水車が、きっとそれでしょう。

にわにいどのある家が多いようです。いどのよこのかきの木に、よくうれた、おいしそうなみが、いっぱいなっているところもありました。うしのなく声が、すぐ近くにきこえます。

だんだん、火のみやぐらが、近くにみえてきました。学校も、もう近いのでしょう。二、三人、学校の帰りらしい、小学校の生徒にであいました。

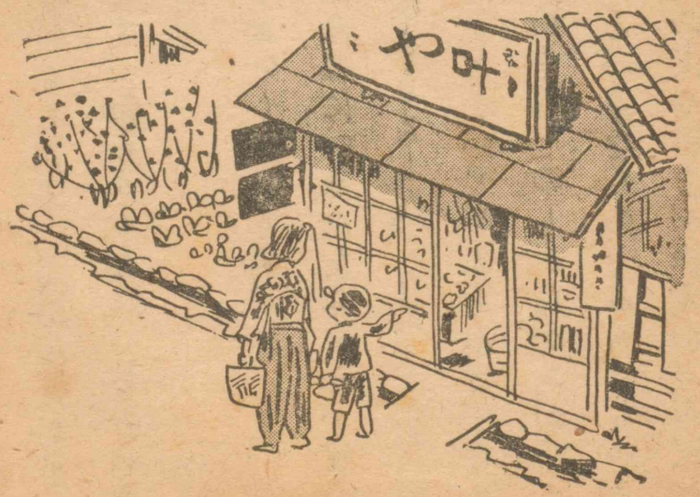
道ばたに、ざっか屋の店があったので、のぞいてみました。いろ

いろなものを賣っています。金物も、紙やふでも、茶わんやはしもありました。わらじまであります。

「まあ、さかなのひものもあるわ。」

「おかあさん、みっちゃんのはくような、赤いげたもあるよ。」

おくの方に、しょうゆのびんらしいものもみえました。いなかのざっか屋は、ひとつの店で、ずいぶんたくさんのしゅるいのものを賣っています。ちょっと、百貨店のようです。



ざっか屋の店をでて、しばらくいくと、赤いポストがみえます。そのよこに、小さなゆうびんきょくがありました。はいってみると、しごとをしている人も、ふたりだけです。たろうくんは、おかあさんに、はがきを買っていただきました。

ここから、としおくんの家までは、五分くらいです。

そのばん、たろうくんは、としおくんとにいさんたちから、村の生活について、いろいろめずらしい話をききました。たろうくんは、町のことを話しました。考えてみると、とかいとのうそんと、それに、りょうし町とでは、ずいぶん人々のくらしのしかたがちがいます。住む家も、きているきものも、いろいろなたのしみも、たいそうちがっています。けれども、もし町の人やいなかの人が、それぞ

れ、自分のしごとにせいをだすことをせず、また、たがいにたすけあうということをしないならば、わたくしたちは、だれも、たのしい、べんりな生活をすることはできないでしょう。

のうそんでつくった米ややさいは、りょうし町でとれたさかなとおなじように、汽車や電車やトラックで、とかいに送られます。そして、とかいからは、きものや日用品や本やひりょうや、のうそんで使ういろんなどうぐが送られてきます。としおくんの村にも、こんどあたらしく、本屋ができるそうです。

こうつうがさかんになり、人のゆききや物のもちはこびがやりやすくなるにつれて、わたくしたちの生活は、いよいよべんりになってきました。そして、遠い土地の人たちも、まるで、となりきんじ

よにでも住んでいるようになってきました。

たろうくんはいま、みつこさんへ、かいがんの町と、としおくんの村のお話を書いて、送ろうとしています。さあ、たろうくんは、どんなことを書いているのでしょう。みなさんは、どう思いますか。

、先生がたへ

社会科第三学年の学習指導の大きな方向は、児童に自分の住んでいる土地を手がかりとして、人人がいかに自然環境に適應し、またそれを活用しているかを理解させることにあるといえます。

この本は、そのような題材を直接とりあげることをせず、それを根底としながら、交通運輸・生産・保健・公共施設等の諸面をとりあげてみたものであります。したがって、この本の目的は、学習指導要領補説にかかげられた主要経驗領域にそい、学習指導要領の第三学年の目標である諸理解を、児童に無理なく獲得させる機会を與えることにあるともいえましょう。

いうまでもなく、この本を通読し理解することのみによって、社会科の学習がつきるわけではありません。この本の役割は、あくまでも児童の学習を側面からたすけ、有効な問題や資料を豊富に提供することにあるのであります。

主人公太郎は、都会の近郊に住むこどもでありますが、この主人公をめぐって展開する種々の場面を通じて、この本を読む児童は、現代の生活の諸面を理解し、とくに自分の住む土地以外の多くのことがらに觸れる機会を與えられるでありましょう。その意味において、この本は、どのような土地に住む児童にも有効に用いられると考えられます。

この本が、児童によって、ただ一編の物語を読むように読み捨てられてしまうのでなく、できるだけ多くの機会に活用され生かされるように、先生がたの配慮と努力とを煩わしたいと思います。

社会科　第三学年用

たろう

Approved by Ministry of Education

(Date June 18, 1948)

昭和二十三年六月十八日　翻刻印刷
昭和二十三年七月十五日　翻刻発行　定價拾円五拾錢
(昭和二十三年六月十八日　文部省検査済)

著作権所有　著作兼発行者　文部省

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
翻刻発行兼印刷者　東京書籍株式会社
代表者　長得一
東京都北区堀船町一丁目八五七番地
印刷所　東京書籍株式会社
東京都北区堀船町一丁目八五七番地
発行所　東京書籍株式会社

文庫
48
412
広島大学図書
2000019412